

# 地域とともに

地域の未来を拓く人づくり  
**初等中等教育支援**

サテライト・プラザを拠点に  
**生涯学習・人材養成**

手取川流域を丸ごと博物館に  
**手取川エコ  
ミュージアム構想**

自然が取り持つ大学と住民の新しい関係  
**角間の里山自然学校**

育児や障害児教育を支援する  
**子育て支援**

薬の疑問はここで解決!  
**くすりと健康プラザ**


学生主体で市街地に新風を吹き込む  
**香林坊ハーバー**

2004

金沢大学が考える  
地域貢献のスタイル

学長 林勇二郎





手をつなげば、  
きつとつまぐらぐ。

大学の「知」と地域の「活力」  
連携から広がる無限の可能性  
皆さんと一緒に、この街を、そして住む人を元気にしていきたい

地域とともに  
金沢大学社会貢献室



Yujiro Hayashi  
President of Kanazawa University

*Special Interview*

# 地域に開かれていく大学 総合力が試される時代に

## 地域貢献と向き合う金沢大学の姿

国立大学法人として新たな船出の時を迎えた金沢大学。大学改革が声高に叫ばれるなか、法人化は地方の大学にとって、その存在価値をあらためてアピールする好機ともいえる。教育、研究分野ではこれまで以上の成果が求められるとともに、大学が果たすべき地域貢献に対する期待も高まっている。船のかじを取る林勇二郎学長に、法人化によって可能性が広がる大学の地域貢献ビジョンについて聞いた。

金沢大学長

**林勇二郎** (はやし ゆうじろう)

工学博士。昭和17年1月17日、石川県金沢市生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了。昭和45年に本学工学部講師に採用され、その後助教授、教授を経て平成9年4月から工学部長。平成11年9月から学長を務める。専門は熱工学。

## 知的財産、人材を確保 「社会のための大学」に回帰

—いよいよ金沢大学が国立大学法人に移行しました。法人化の意味はどこにあるのでしょうか。

平成16年4月1日、金沢大学をはじめとする国内の国立大学87校はすべて法人に移行しました。法人化が推し進められた背景には、一つに知的財産をめぐる競争が世界規模で激化し、優秀な人材を育成するシステムの再構築が叫ばれているという側面があります。

日本は戦後、大きな経済発展を遂げ、フロントランナーとして世界をリードする立場にまで登りつめました。科学技術創造立国、人材立国であろうとする日本にとつて、知的財産、人材の確保は必要不可欠となっているのです。

—法人化で何が変わるのでしょうか。

これまでの国立大学は、国が示す画一的な設置基準のもとで、カリキュラムを組んできました。金沢大学や富山大、東京大といった大学間の教育には大差がなく、研究のうえで大学の個性が際立ちにくかったといえます。

国立大学が法人に移行したことで、独立した活動を展開できるといふ自由度が高まり、主体性や個性を伸ばしていく環境が整えられました。個々の大学が独自の教育研究を行うことにより、革新的な変化が期待されるのです。



すなわち、ここで大切なのは、法人化で「組織や制度が変わる」ことではなく、「教育や研究をどのように変えていくか」です。金沢大学はいま、「社会のための大学」という原点に立ち返る機会を得ました。

### 人材育成サイクルを重点に ニーズに応じた実践研究を

—法人化により金沢大学が目指すものは。

金沢大学は法人化に伴い、学術研究を預かる立場として「金沢大学憲章」を制定し、地域と世界に開かれた教育重視の研究大学を目指します。憲章は「教育」「研究」「社会貢献」などを柱とし、明確なビジョンを示しました。

—教育についてはどのようなことが行われるのでしょうか。  
教育分野では、多様な学生を受

け入れる人材育成サイクルの構築を主眼に置いています。大学は、学生や院生だけではなく、高等専門学校や他の大学からの編入も受け入れており、様々な教育機関との接続を果たしています。このほかに、社会人を対象としたリカレント教育、高齢化社会に適応した生涯学習を充実させていくことで、間口の広い教育が実現されるものと考えています。

また、社会人を養成する最終高等教育機関として、学生が専門知識を習得し、課題探求能力を身につけるだけではなく、倫理観や国際感覚を確立する「人格形成」にも踏み込んだ教育を進めていく必要性を感じています。

—研究はどうなるのですか。  
これまでに蓄積された知的財産、先人の知恵といった研究をさらに発展させ、新たな「知」を創造していく基礎研究は、これまでと変

わらず大切にしていきます。しかし、長期的な視野に立った基礎研究に限らず、文系、理系学部ともに短期的で応用が可能な応用・実践研究にも力を注いでいかなければなりません。

大学にこのような実用的である研究が求められている以上、社会や企業のニーズを的確に読み取り、基礎から応用にわたる幅広い研究に取り組みざるを得ない。企業との結びつきが考えられる分野では、外部からの資金も導入することで、大学の自主自立にもつながっていくことでしょう。

### 知的財産を地域に還元 住民に先端医療を提供

—大学における社会貢献の期待は高まっています。

これまでの大学が行ってきた教育、研究そのものが社会貢献です。職業人や善良な市民を社会に送り出し、研究では新たな「知」を創造してきました。ただ、現代社会においては、従来の貢献のスタイルが大きく変わりつつあります。

金沢大学が掲げる社会貢献は、地域にとどまらず、日本の国そのものや国際社会への貢献という意味も含んでいます。大学が有する知的な情報を積極的に地域に還元し、学術文化の継承発展、あるいは教育、医療、福祉といった生活基盤の整備に努める。そして環日本海、さらには東アジアの「知の拠点」として、世界に向けて情報

を発信していきます。

学生教育は入学前から卒業後に至るまでに拡大し、研究成果である知的財産は発掘・管理を徹底させ、社会に環流する仕組みを形作っていきます。また、先端医療は地域住民とのつながりが深いため、高度な医療の研究を進めつつ、同時に情報提供も積極的に進めたいと考えています。

### コディネーターを設置 大学への要望を即座に把握

—金沢大学では地域貢献事業に力を入れていますね。

文部科学省は、平成14年度から地域貢献特別支援事業をスタートさせ、岩手、群馬、鳥取、広島の大大学とともに金沢大学も第1次選定大学の指定を受けました。この事業は、自治体と国立大が将来にわたる真のパートナーシップを確立し、大学全体で地域貢献を組織的、総合的に取り組むという目的があります。5校のなかには選ばれた理由には、金沢大学が「地域貢献コディネーター」の設置を打ち出したことが挙げられるでしょう。

地域貢献を行ううえで、大学が考えることには限りがあります。地域住民が金沢大学に対して、どのような期待、要望を持っているのかを把握するのがコディネーターの役割です。産学連携の分野ではコディネーターが存在していましたが、地域貢献では金沢大



学が全国初となりました。コーデ  
イネーターには、地域、自治体と  
大学との橋渡し役として、活躍し  
てもらっています。

—実際にはどのような事業があ  
るのでしょうか。

金沢大学ではこの事業のもと、  
金沢市西町教育研修館に「金沢大  
学サテライト・プラザ」を開設し、  
ミニ講演や公開講座、セミナーを  
開いています。角間キャンパス内  
には里山自然学校があり、金沢市  
教育プラザ富樫を拠点とした子育

て支援も行っています。また、初  
等中等教育支援として学生が中小  
学校などを訪れたり、街中のにぎ  
わい作りとして「香林坊ハーバー」  
を学生が運営したり、事業での活  
動は広範囲に及んでいます。

### 地域に根差す大学を実現 活動への住民参加が必要

—様々な事業を展開されていま  
すが、まだまだ大学は「敷居が高い」  
というイメージを持つ人もいます。

これまで、大学に対して「敷居  
が高い」という印象があったこと  
は否定できませんが、敷居の高さ  
はこれまで地域貢献事業として推  
進してきた積極的な活動によって、  
徐々に低くなってきているのでは  
ないでしょうか。金沢大学が真に  
社会に開かれた大学であるために  
は、地域に根差していく必要があ  
ります。地域住民と手を携えるこ  
とによって地方文化が発展し、大  
学の知的拠点としての価値が見出  
せるのです。

—根根を取り払う点でも地域貢  
献活動の意味は大きいのでしょうか。  
成果は挙がっていますか。

金沢大学が地域に貢献している  
ことはわずかで、貢献とはいえな  
いかもありません。実際の活動に  
は地道な努力が必要で、すぐに結  
果が出るものではないでしょう。  
しかし、地域に溶け込んでいこう  
とする大学の姿勢が、活動には込  
められているのです。

大学の教職員ができる活動にも  
限界があります。里山自然学校の  
事業を例に挙げれば、竹林を管理  
するノウハウは大学側にはなく、  
地域住民に手助けをしてもらって  
維持しています。

このように教職員が学外に出て  
活動するだけではなく、大学キャ  
ンパスに住民を招き入れ、活動に  
参加してもらい取り組みを推進し  
なければなりません。地域の産業  
構造やコミュニティのなかに、大  
学が本当の意味で組み込まれてい  
く過程の一環だと思っています。

### 学術文化都市の未来を創造 多様な総合大学を目指す

—今後の地域貢献活動はどのよ  
うに進めていくのですか。

金沢大学は加賀藩の藩校として  
始まり、以来、140年の歴史を  
持っています。前田家は学術文化  
に造詣が深く、焼き物や染物など  
の文化を積極的に取り入れてきま  
した。加賀の地が「天下の書府」  
と呼ばれたゆえんでしょう。現代

においてもこの伝統、文化、工芸  
は連綿と受け継がれており、この  
火を消さないために大学も努力し、  
学術文化都市の新たな姿を描いて  
いきたいと考えています。

また、社会構造の変化により、  
教育機関における子供との関わり  
方が問われる時代になりました。  
学校、地域、家庭が連携した社会  
システムを整備したうえで、教育  
に取り組まなければならないでし  
ょう。一方で、高齢者の増加傾向  
は顕著となり、生活の質を高めて  
いく生涯学習の場としての役割は  
大きな位置を占めていくことにな  
ります。

社会貢献、社会連携を進めてい  
くなかで、大学にはこれまで以上  
の専門性が求められています。多  
面的な「顔」を見せる総合大学が、  
社会や地域といった『鏡』に毎日  
その姿を映せるよう、労を惜しま  
ず努力を続けていきたいですね。



# 中村副学長から橋本副学長へ 社会貢献室の新たな“顔”



地域貢献推進室の定例会議の席でがっちりと手を握る  
中村副学長(左)と後任の橋本副学長(右)

金沢大学地域貢献推進室の室長を2年にわたり務めた中村信一副学長が3月30日、同推進室の定例会議で室長退任に伴う事務引き継ぎのあいさつをした。会議には、4月1日から「社会貢献室」と名称変更され、同室長となった後任の橋本哲哉副学長も出席し、抱負を述べた。

中村副学長は、「教育と社会は密接に連携している。大学はこれまで『あること』そのものが社会貢献だったが、最近はより直接的な貢献が求められるようになった。今後も大学が地域のニーズを的確にとらえて力を発揮していくことが大切だ」とあいさつ。橋本副学長は、「大学は変革しなければならぬギリギリのところに来ている。今後、どのような形で社会貢献をしていくか、私なりにベストを尽くしたい」と力強く決意を述べた。

大学の知と地域のニーズを繋ぐ

## 「社会貢献室」ができました!

金沢大学「地域貢献推進室」は、4月1日から「社会貢献室」に生まれ変わりました。  
もっと“グローバル”に大学の知的資源の還元と情報発信をし、地域社会や国際社会に貢献します。

※グローバル グローバル (global)とローカル (local)の造語。国境を越えた「地球規模の視野」と「草の根の視点」でさまざまな問題を捉えていこうとする考え方。

### 金沢大学社会貢献室

〒920-1192 金沢市角間町(金沢大学附属図書館内)  
TEL076-264-5290 FAX076-234-4052 E-mail:chiiki@ad.kanazawa-u.ac.jp



Special Interview

3 学長 林勇二郎  
**地域に開かれていく大学  
総合力が試される時代に**

Topics

6 **中村副学長から橋本副学長へ 社会貢献室の新たな“顔”**

人材養成

8 初等中等教育支援の第一歩  
**児童から先生まで学べる大学の「課外」授業**

10 平成15年度の主な初等中等教育支援事業

11 「社会教育主事講習」と「学校図書館司書教諭講習」—  
**幅広い生涯学習指導者の養成**

生涯学習

12 豊富な生涯学習プログラム—あなたが主役、舞台は金沢大学—  
**知的好奇心、探究心で学びの輪を広げよう**

文化・情報発信

14 流域に眠る資源を再発見  
**手取川一帯を博物館に 地域の新たな絆を創造**

16 文化・情報発信事業の紹介  
地域ならではの情報を発信し独自の文化を継承していく

複合領域

18 里山自然学校は住民主導で運営を  
**豊かな自然が取り持つ大学と住民の新しい関係**

産学官連携

20 共同研究センターからの報告  
**産学官連携に対する取り組み**

医療・保健・福祉

22 木村留美子研究室の調査研究から  
**子育て支援のニーズ調査にみる  
現代の親子関係事情**

24 軽度発達障害児の総合的支援に向けて  
**共通認識を持つことが支援への第一歩**

26 薬物治療への信頼を高める  
**医薬品の悩みを解消へ 薬剤師が相談の窓口**

28 気になる心身のトラブル 健康に関する悩みを解決

地域課題

29 中心部のにぎわいを取り戻せ  
**かつての映画館街に新風を吹き込む  
学生グループ「香林坊ハーバー」**

30 地域とともに歩む金沢大学  
**社会貢献体制とその取り組み**

32 地域特性を考えた経済学  
**北陸経済の足元を見直す大学の知識とネットワーク**

34 編集後記、プレゼントつきアンケート

# 児童から先生まで学ぶ。大学の「課外」授業

21世紀に羽ばたく人材をどのように育成していくか——。金沢大学の教員と県内の小・中・高等学校教員らでつくる「初等中等教育支援推進協議会」が発足して1年あまり。両者の連携が強まったことで、児童・生徒だけでなく、学校教員や学生にもその効果が及んでいる。



子供たちの好奇心をくすぐるような楽しいテーマで授業が行われている  
(写真は「こども科学教室」視覚の不思議—キミの目はだまされている!?)—)

## 地域の未来を拓く 子どもの育成を

金沢大学では、「地域の未来を拓く人づくり」事業のもとで初等中等教育を支援している。平成15年度の支援事業は、「出張講義」「個別大学見学会」「学生派遣」「県内教員研修会」「北陸三県高校訪問プロジェクト」の5つに大別される。このうち、出張講義は小中学生向けと高校生向けの2種類がある。例えば小学生向けでは、県教委を通じて「遺伝子を取り出して自分の目で見てみよう」「音の原理と手作りスピーカー」など10テーマを示し、興味を持つ学校があれば手を挙げてもらう。どのテーマも、通常の授業では習わない学習内容とあつて、高い人気を誇る。

児童の反応も上々で、大学側は「出張講義をもとに、各学校でさらに内容を応用、発展させ、子供たちの学習意欲を高めてもらいたい」と話す。

## 小中高の先生も 実験や英会話に参加

学ぶのは子供たちだけではない。大学では県内の教員を対象にした研修会も開催し、教員の資質向上にも一役買っている。昨年8月7、8日、宝町キャンパスの学際科学実験センター遺伝子研究施設で、「理科系教員のための組み換えDNA実験教育研修会」が開かれ、中学と高校の教員7人が大学の担当教員の指導を受けながら、最先端の実験に取り組んだ。参加した教員の一人は、「目に見えない遺伝子の働きがいかにかダイナミックに生物の中で機能しているかを実感することができて、生徒に教えるうえで大いに役立つと

思う。これからも、このような最先端科学についての話を聞く機会がほしい」と充実した研修内容に満足したようだ。政府は今年3月、構造改革特区の第4回申請で、小学校から英語を教える金沢市の「世界都市金沢小中一貫英語教育特区」を認定した。4月からは、評価を伴う「英語科」が市立の全小学校で導入されることになり、小学校の教員にとって、英会話を中心とする英語能力の向上は緊急の課題となっている。

## 窓口の協議会設置で 連携を深めていく





「やさしい英会話」の1コマ。教員の英会話レベルに応じて初級と中級のクラスがある

## 大学生にとっても 絶好の活躍機会

文部科学省は昨年4月、「放課後学習チューター」制度の調査研究をスタートさせ、全国100地域の小中学校175校、中学校104校、盲聾養護学校5校の計284校と、これらの学校にチューター（学生）を派遣する大学73校を指定した。

同制度は、教員志望の学生が学校を訪問し、放課後や昼休みなどに教員の下で、きめ細かな学習の手助けをすることで、児童・生徒の学力向上を目指す。加えて、学生が学校で子供たちと接しながら、学校や子どもの姿を知り、教員に必要な能力の向上につなげるという狙いもある。

金沢大学もチューター制度の指定を受け、約40人が登録。7、8人ずつのグループに分かれて、派遣先の学校を訪問している。すべての事業と同じように、事前に学校側と打ち合わせをしたうえでニーズを探り、学校内での活動方針を決めている。学生たちで自主解決が難しい部分については、大学のアドバイザー教員がサポートするという仕組みだ。

学校側からは、「年に一度来てくれる教員もありがたいが、定期的に学生が来てくれる方が助かる」との声も上がっている。もちろん、教員志望の学生にとっては、教育の現場を肌で感じる絶好の機会であ

り、「教え方が悪ければ「わからない」といつてくれるし、わかれば「わかった」と笑顔で答えてくれるのでうれしい」（4年女子）、「学校の先生方には温かく接していただき、帰りは校長先生に送っていただいたこともありました。そんな先生たちにお返しできるよう、来年度も頑張りたい」（1年男子）など、熱意と意欲を持って取り組み姿がうかがえる。こうした取り組みもあつて、金沢大学は平成16年4月から、チューター制度とは別に、学校に学生が出向き教員のアシスタントを行う正規の教養教育科目「小学校ティーチングアシスタント実習」を設けた。

大学ではチューター制度とは別に、留学生も派遣している。こちらは学習指導ではなく、留学生の母国の文化や習慣などを子供たちに教えるのが目的だ。これまで、「大学」、なかでも国



理学部の見学会「ふれてサイエンス」。各学部が知恵を絞りながら、キャンパスを積極的に開放している

## 初等中等教育支援

金沢大学は平成14年12月、県内の初等中等教育関係者（「初等中等」とは、小学校から高校までを指す）とともに「初等中等教育支援推進協議会」を設置。県や市町村の教育委員会関係者、学校長らが集い、学習に対する子供たちの興味・意欲を引き出すための教育のあり方、大学との連携方法などを模索、研究している。

また子供たちの学習意欲や好奇心

心を刺激するだけでなく、大学の教員と学校教員が研究会などを開き、交流を深めながら教員の資質向上にも取り組んでいる。

これをきっかけに、金沢大学の学生自身が教育の現場に参加する機会も増えた。教員志望の学生にとっては、教育実習前に学校の雰囲気になれるチャンスでもあり、「社会に必要とされる人材の育成」にもつながると期待を集めている。

出張講義は行われてきた。しかし、小中高の教員と大学の教員同士の個人的関係に頼るケースがほとんどで、組織的な連携の必要性が指摘されてきた。

大学の窓口である学生募集課の初等中等教育支援コーディネーター、掛野由香さんも次のように指摘する。

「これまで、小中学校や高校にとっては大学側の窓口がわからず、個人のつてを頼るしかなかった。

そこで、初等中等教育支援推進協議会を設置しました。設置後、両者の連携は確実に深まりつつあります」。

一見、いいことづくめのようにも思える支援事業だが、出張講義などの「需要」がますます増え続ければ「供給」、つまり大学から派遣できる教員数が「追いつかなくなる」という問題も出てくる。そこで、「助っ人」として注目を浴びるのが、教員志望の学生たちだ。

# 平成15年度の主な初等中等教育支援事業

## 化石から探る太古の地球と生物進化

金沢子ども科学財団と共催し、貝化石を用いて過去の気候変動を推定する観覧会を行う。小学校3・4年生を対象に行い、57人が参加した。(理学部)

## 石川県の理数科を置く3高等学校との連携

理数科を置く3高等学校、石川県教育センター、石川県教育委員会と連携し、理数科課題研究発表会への参加・指導・助言などを行う。(理学部)

## ウィークエンド家族夢工房「びっくり科学教室」

小学生とその保護者を対象にした計11回の講座。身の回りにありふれた科学のいろいろな現象を、わかりやすい講演と実演・実験を行って説明し、科学への関心を深める。(工学部)

## スーパー・サイエンス・ハイスクール

文部科学省の研究開発プロジェクト。金沢泉丘高校の科目「コスモサイエンスⅠ」へ講演と研究室の見学・実習を組み合わせたプログラムを提供した。(工学部)

## 工学部「キャラバン隊」

高等学校へ工学部教員が出向き、直接高校生に対して教育・研究の概要説明や進学相談を行う。(工学部)

## 高等学校への学部・学科説明、出張講義

金沢大学の学部・学科の説明、模擬講義等を希望する高等学校で行う。(全学部)

## 小学生・中学生対象の放射線教室

小・中学生を対象。簡単な放射線計測器の作成、身の回りの放射線を測定するなどの実験を行い、放射線・放射能について理解するとともに、科学の不思議・面白さを体験する。(学際科学実験センター)

## 科学実験サポーター

児童の科学に対する興味を高めるため、大学教員等による科学実験サポートチームを編成し、小学校で実験教室を開催する。(学生部入試課[平成16年4月1日より学生部学生募集課])

## 国際理解教育

### 小・中・高校生のための「国際理解教育」への外国人留学生派遣事業

国際理解教育の充実に寄与するために、金沢大学と石川県や金沢市の教育委員会などが連携して事業を実施している。(学生部留学生課[平成16年4月1日より研究国際部国際課])

### 異文化理解&外国語教育「よろず相談室」

主にインターネットを利用して、国際理解教育や外国語教育に携わる小学校教員をサポートする。(外国語教育研究センター)

### 国際理解教育ワークショップ

国際理解教育に取り組む小学校教員のサポートを目的とした事業。平成15年8月5日に「食べ物を通じて知る国際関係」をテーマに開催した。(外国語教育研究センター)

### 国際理解教育(鳴和中学校来訪)

鳴和中学校の生徒が、総合的な学習「英語は本当に国際語か?」という研究テーマの勉強のために来訪。外国語教育研究センターの教員が対応した。(外国語教育研究センター)

### 国際理解教育(二水高等学校での授業)

「いしかわスーパーサイエンスハイスクール」の語学教育重点校に指定された金沢県立二水高校のプロジェクト「多言語講座」を支援した。(外国語教育研究センター)

## 地域教員との研究会

### 教員のための理科講習会

—より魅力的な事業を目指して—

石川県内小学校の教員を対象に、理科の専門知識や実験・実習などの技術に関する支援を行う。(教育学部)

### 加賀市における教育相談体制づくりへの支援

加賀市の「スクーリング・サポート・ネットワーク事業」の一環である、不登校問題等の改善に向けた学校と関連諸機関の連携の充実化・体制づくりへのアドバイス等の支援。(教育学部)

### 教職員研修プログラム開発研究会

小中学校教員、金沢市教育委員会専門職員、大学教員などをメンバーに研究会を設置、教職員の専門性充実方策について協議し、研修プログラムの共同開発研究を進める。(教育学部)

### 学校改善支援研究会

小中学校教員、松任市教育委員会、大学教員などをメンバーとする「学び舎創成連絡会」を組織し、松任市で実施している学校施策について検証するとともに、学校のあり方について協議し支援する。(教育学部)

### 養護教諭の実践的研究能力向上のための研究会支援

養護教諭の研究能力向上を目指した鳳至郡養護教諭研究会の定期研究会(年6回)に大学教員を派遣し、指導助言を行う。(教育学部)

### 大学・地域連携事業「教育フォーラム」の開催

教師、臨床心理士を対象。「学級づくりと学校・教師の役割」をテーマに講演、分科会による事例検討会、パネルディスカッションを行った。(教育学部)

### 小中一貫英語教育のための小学校英語カリキュラムの整備および小学校教諭を対象とした英語研究セミナー

小中学校教諭、外国人語学指導助手、民間協力員と連携し、小学校英語のカリキュラム策定と、音声教材の開発を行う。また、県内の小学校教員向けに英語教育セミナーを開講する。(教育学部)

### 石川県技術・家庭科研究会活動支援

中学校技術・家庭科の授業における教育内容の向上を目指して定期的に開催されている石川県中学校技術・家庭科研究会の支援。教材及び指導法の開発と活動支援を行う。(教育学部)

### 理科系教員のための組換えDNA実験教育研修会

中高校理科系教員を対象。実習を通して組み換えDNA実験の安全性と、最先端の「遺伝子研究」と社会との関わりへの理解を深めることを目的に、研修会を行う。(学際科学実験センター)

### 金沢市小学校教科等研究会理科部会研修会

金沢市内の小中学校教員から要請を受けたテーマについて研修を行った。(学生部入試課[平成16年4月1日より学生部学生募集課])

### やさしい英会話教室

外国語教育に携わる小学校教員をサポートするために開講。(外国語教育研究センター)

## 出張講義

### 「大学jrサイエンス&ものづくり」

—ピンホールカメラをつくらう—

教育学部美術教室と金沢子ども科学財団との共催で、小学校中学校を対象に、段ボール箱による手作りのピンホールカメラの制作と撮影のワークショップを行った。(教育学部)

## 分類

### 事業名

事業の概要(担当部局)

## キャンパス開放

### 金沢大学小・中・高一貫スポーツ支援

金沢大学バスケットボール部はバスケットボールを通して、スポーツ交流の場を提供し、教育機関や地域社会と交流を図っている。(教育学部)

### 理学部「ふれてサイエンス」

理学部オープンキャンパス。理学部の全学科が、研究の一端を展示や実験などで分かりやすく紹介する。15年度は11回目の開催となり、1405人の入場者があった。(理学部)

### 薬学部「楽しい薬学部への一身体験」

薬学部ってどんなところかな?研究者になれるかな?高校生が将来の進路を決定する際の助けになるように、また薬学部を知ってもらうために開催している。(薬学部)

### 工学部「てくてくテクノロジー」

工学部オープンキャンパス。地域住民向け・卒業生向け・企業向けの幅広いテーマを設定し、テーマごとの展示や実演、研究紹介をする。(工学部)

### 小中学生のためのものづくり教室

小・中学生にものづくりのおもしろさを体験してもらい、科学技術への関心を深める。15年度は8月21日に開催した。(工学部)

### 高等学校個別大学見学会

オープンキャンパスに参加できない高校生に、希望する高校毎に、事前に大学への質問事項等を聞いたうえで、職員が質問の回答を盛り込みながら、大学のキャンパスを案内している。(全学部)

### 第5回ミレニアムフォーラム

自然科学研究科物質構造科学専攻で毎年開催している。研究を一般市民にもわかるように講演会を行う。(理学部)

### 理学部談話会

昭和56年から実施している。理学部教員が研究活動に関連した話題・研究成果を一般市民や専門でない学生にもわかるように講演をしている。15年度は、約210人が参加した。(理学部)

## 学生派遣

### 小学校ティーチング・アシスタントの実施

教育学部の学生を公立小学校にティーチングアシスタントとして派遣する。(教育学部)

### 放課後学習チューター

教員志望の学生が小・中学校に出向き、放課後等に児童・生徒の学習の相談にのる。(学生部入試課[平成16年4月1日より学生部学生募集課])

### 自治体等からの要請による科学教室補助等

学生を科学実験の補助として派遣し、児童4人前後の1グループに1人の学生がつく。(学生部入試課[平成16年4月1日より学生部学生募集課])

# 幅広い 生涯学習指導者の養成

—「社会教育主事講習」と「学校図書館司書教諭講習」—



(上)社会教育主事講習  
(中)社会教育主事フォローアップ研修(ワークショップ)  
(下)学校図書館司書教諭講習

**「社会教育主事講習」**  
(文部科学省委嘱事業)  
—就職にも役立つ、法に基づく資格—

社会教育・生涯学習の分野で専門的・技術的な指導・助言を行う教育委員会に必置の専門的職員を養成し、社会教育法に基づく資格を付与する講座。北陸3県を対象に約100人を募集している(平成15年度は受講者65人、修了者59人、受講料有り)。

毎年、7月中下旬から8月中下旬まで約5週間、大学教育開放センターを中心会場として実施している(15年度は7月22日～8月22日で終了、16年度は7月20日～8月20日の予定)。

受講資格は、主に①教育職員の普通免許状を有する人②大学に2年以上在学し62単位以上修得した

人③高等専門学校卒業者―で、社会教育関係の職に4年以上あった人なども受講できるような条件が緩和されている。

講習内容は、「生涯学習概論」(2単位・30時間)、「社会教育計画」(2単位・30時間)、「社会教育演習」(2単位・60時間)、「社会教育特講」(3単位・45時間)。大学などで修得した類似の内容は免除される。

また、複数年かけて単位ごとに分割受講することもできる。参加型学習によって、社会教育主事の基礎的な知識と実践力、プレゼンテーション能力などが身につく。

(大学教育開放センター)

**「社会教育主事フォローアップ研修」**  
ワークショップで実践力が高まる—

社会教育主事として活躍中の現職を対象に、その資質・能力の向上を図るリカレント教育として実施。ワークショップ中心の研修を、

国立能登青年の家と共催で行っている(受講料なし)。国立大学では唯一の自主事業での取り組みである。(大学教育開放センター)

**「学校図書館司書教諭講習」**  
(文部科学省委嘱事業)  
—現職教員に役立ち、教職を目指す人に有利—

学校図書館の専門的職務に携わる司書教諭を養成し、学校図書館法に基づく資格を付与する講座。北陸3県を対象に150人を募集している(平成15年度は受講者81人、修了者6人、受講料なし)。

毎年、8月中に2～3週間かけて、金沢大学角間キャンパス・教育学部を中心会場として実施している(平成15年度は、8月19日～8月28日で終了、平成16年度は、8月16日～8月31日の予定)。

計10単位。2年間で2科目と、3科目に分割して開講するので、複数年かけて単位ごとに分割受講することになる。大学などで修得した類似の内容は免除される。

15年度は、「読書と豊かな人間性」「情報メディアの活用」を科目として開設した。16年度開設科目は、「学校経営と学校図書館」「学校図書館とメディアの構成」「学習指導と学校図書館」の予定。

受講資格は、①教育職員免許法に定める小学校、中学校、中等教育学校、盲学校、聾学校又は養護学校の教員免許を有する人②大学に2年以上在学する学生で62単位以上を修得した人―となっている。

講習内容は、「学校経営と学校図書館」「学校図書館とメディアの構成」「学習指導と学校図書館」「読書と豊かな人間性」「情報メディアの活用」の5科目・各2単位、合

「読み、書き、話すなど言葉の教育」の重視が提言されているなか、学校における子どもの「読書離れ」解消への取り組みの中核的な役割を担う力が身につく。

子どもたちに、読書活動を通して、言葉を通じて、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かにものにし、人生をより深く生きる力を身につけさせる」という教員としての指導力が身につく。

(大学教育開放セミナー)

豊富な生涯学習プログラム —あなたが主役、舞台は金沢大学—

# 知的好奇心、探究心で 学びの輪を広げよう



公開講座の化学系のテーマには小学生も参加した(写真は「おとなと子どもで一緒に楽しむ化学実験」)

公開講座の受講、スポーツ、ボランティア、趣味など「生涯学習」に含まれる活動は多い。大学でも教育や研究とともに、地域住民の多様な生涯学習ニーズを把握し、様々な機会を通じてこれに応えるよう努めている。金沢大学の「使命の一つ」である生涯学習の主なプログラムを紹介する。

## 公開講座「生涯にわたる学び」

金沢大学の社会貢献・地域貢献の中核的事業の一つ。地域の皆さんに意欲を持って取り組んでもらおうと、大学の持つ知的財産を地域住民の方々に開放し、生涯学習の推進に取り組んでいる。また、石川県民大学校とも連携している(受講料必要)。

講座は、地域住民の要望や現代的な課題、大学の研究の特色などを踏まえ、テーマ性を持たせてい

るのが特徴。教養的要素、リカレント的要素、講義主体、実験・実技主体、講義・実験・実技の複合など受講者の視点に立って企画している。

自然科学系、医学系、人文・社会科学系のバランスを考慮し、学部の特徴を発揮した講座、全学的な講座など、毎年、20講座程度を開設している(平成15年度は22講座、16年度は21講座の予定)。(大学教育開放センター)

## 北陸3大学連携「まちなかセミナー」

金沢、富山、福井の3大学が共催、3県の教育委員会が後援し、平成15年度初めて開催した。セミナーは、「地域住民の多様な学習ニーズに応え、支援すること」「自己発見、自己啓発、相互交流を促進する」「知との出会い」の場を設けること、「北陸地区の大学間連携を強化すること」の3点を主な目的とした。

開催地の大学の担当教員がコーディネーターを務め、他の2大学の教員が講演し、講演後、参加者を交えてテーマにそったディスカッションを行った。

金沢会場(事務担当…金沢大学  
大学教育開放センター)

【開催日】平成16年2月8日(日)

【場所】金沢大学サテライト・プラ



3大学連携のまちなかセミナーであいさつをする中村信一副学長

ザ【テーマ】「北陸発の文化—未来ロボットとの出会い—」【参加者数】45人

富山会場(事務担当…富山大学  
生涯学習教育研究センター)



サテライト・プラザのミニ講演



盛況だった「イグ・ノーベル賞」受賞記念講演



公開講座「奇跡のホルモン・メラトニンを合成しよう」

「開催日」平成16年2月29日（日）  
 【場所】とやま市民交流館【テーマ】  
 「北陸発の自然―雪や地震にどう対応するか―」【参加者数】40人  
 福井会場（事務担当：福井大学総務部評価課）  
 【開催日】平成16年3月7日（日）  
 【場所】福井大学アカデミーホール  
 【テーマ】「北陸発の食―ワイン・酒・酔い―」【参加者数】40人  
 学習機会の提供を通して生涯学習の振興を図ることを狙った「ま

生涯学習の機会を提供し、地域と大学との交流を深めるため、「金沢大学サテライト・プラザ」（金沢市西町教育研修館内）では平成12年度から毎月1回・土曜日の午後、専門性の高い学術研究などの講演を参加費無料で行っている。  
 テーマは、①本学の「講演テーマ集」に登録しているもの②市民などの要望③マスコミなどの関心事の中から、適時性、話題性などの観点で企画している。  
 15年度は、次のテーマで実施した（参加者計426人）。

「精神医学からみた不登校とひきこもり」「里山の魅力―金沢大学「角間の里山自然学校」の取り組みから―」「タバコと健康」「加賀藩が生んだ偉人「高峰譲吉」」「アウシュヴィッツの悲劇はいかにして起こったか」「水晶の右と左」

ちなかセミナー」は、高度化・多様化する地域の皆さんの学習ニーズに応える上でも、大いに意義があった。  
 一つのテーマのもとで、北陸のそれぞれの大学が有している人的・物的「財」を地域の皆さんに「発信」するため、さらに多くの大学と連携・協力しながら多様な学びの機会を提供することを検討していく。  
 （大学教育開放センター）

「その「かたち」と「なかみ」」「いのちの教育」「同位体の化学と生態学」「医薬品の南北事情・日本を見直す」「バレーボール・オリンピック」金メダル監督にみる指導者像」  
 講演は、テレビ会議システムを利用し、「遠隔講座」として希望する市町村に同時双方向で中継配信している（15年度は、輪島市、小松市、津幡町、寺井町、田鶴浜町で延べ6会場）。また、希望者には講演録集も配布している。

## サテライト・プラザ「ミニ講演」など ―気軽に学び、ふれあいが深まる―

## 「生涯スポーツ研究会」の開催

金沢大学公開講座で参加者からの研究会の開催希望に応え、平成14年度、生涯スポーツをテーマとした講座の終了に際し発足した。研究会には金沢市、松任市、能都町から参加者があり、15年度は金沢大学サテライト・プラザで毎月第3木曜日に定期研究会を開催

した。テーマは、子どもスポーツの現状分析と子どもスポーツがいかにあるべきかなど、参加者の抱える問題や課題、参加者の経験を話題として、精力的に検討を加えた。研究会は16年度も継続される予定。  
 （教育学部）

## ビデオライブラリー

大学教育開放センターでは、かつてテレビを通して行われた放送講座の収録ビデオが保存されている。この放送講座ビデオは、原則としてセンター内での利用となる。また、広く地域住民に貸し出し、ビデオでの学習活動を促進するため、平成14年度は「こころの病気はこわくない」（協力：医学部附属病

院ほか）のテーマで10巻、さらに15年度は「健やかに人生を生きるために」（協力：薬学部）のテーマで3巻、いずれも金沢大学で制作した。今後ともこうしたビデオライブラリーの充実に努めながら、地域住民や関係機関などによる利用を促進していく。  
 （大学教育開放センター）

## 市町村共催公開講座

県内の各市町村教育委員会が地域住民を対象として企画し、金沢大学などの教員が講師となって出向く講座。昭和51年度から平成14年度までに1226講座、受講者数約5万2000人、15年度は32講座開かれた。  
 趣味・教養に関する講座から、近年は、健康、環境、男女共同参画、高齢社会、ボランティアなど現

代的な学習課題をテーマとした講座が増えてきている。テーマの設定にあたっては、平成14年から作成、配布している「金沢大学教員講演テーマ集」が活用されている。市町村と密なる情報交換をしなから様々なテーマの講座開設に努めていきたい。  
 （大学教育開放センター）

流域に眠る資源を再発見

# 手取川一帯を博物館に 地域の新たな絆を創造

古来、人は生活のなかで川の存在を身近に感じてきたが、現代人にとっての川は、以前ほど日常にかかわることは少ない。手取川をエコミュージアム化する構想は、川に再びスポットライトを当てること、地域の「コミュニティ」を再生させていくきっかけを与えようとしている。

## 地域固有の財産が 博物館の「展示品」に

「エコミュージアム」という言葉を目にしたことはあるだろうか。

「地域丸ごと博物館」とも呼ばれるこの構想は、約15年前にフランス



手取川エコミュージアム構想の意義について語る  
神谷教授

で考え出され、現在では世界各国に広がりをを見せている。ミュージアムと聞けば、「博物館の中に展示物を置いて眺めるだけ」と勘違いするかもしれないが、実際に博物館を建てるわけではない。地域には、その土地でしか生まれない自然、文化、伝統、産業、歴史などが、すでに存在している。地域固有の資源の価値を再び見直し、地域全体を一つの博物館に見立て、地域の振興に役立てていくことが、この構想の真の目的である。

「時間」の博物館「地域の魅力の保全センター」「住民と行政のパートナーシップ」といった特徴が挙げられる。子どもから大人まで学べる生涯学習の場であり、住民が専門家と手を携えて地域を調査研究していく研究所の役割も持つ。伝統文化を体感でき、生活様式や文化、記憶の保全も同時に行う。これらの活動は「住民主体の運営」が根本にあり、大学や行政がバックアップしていく体制が必要となる。

文部科学省では、地域に開かれた大学が研究成果を還元し、地域との連携を深めることを推進する。構想が持ち上がった背景には、石川県人と手取川とのかわり合いが少なくなってきたことが関係している。

## 川とのつながりが 地域交流を活発にさせる

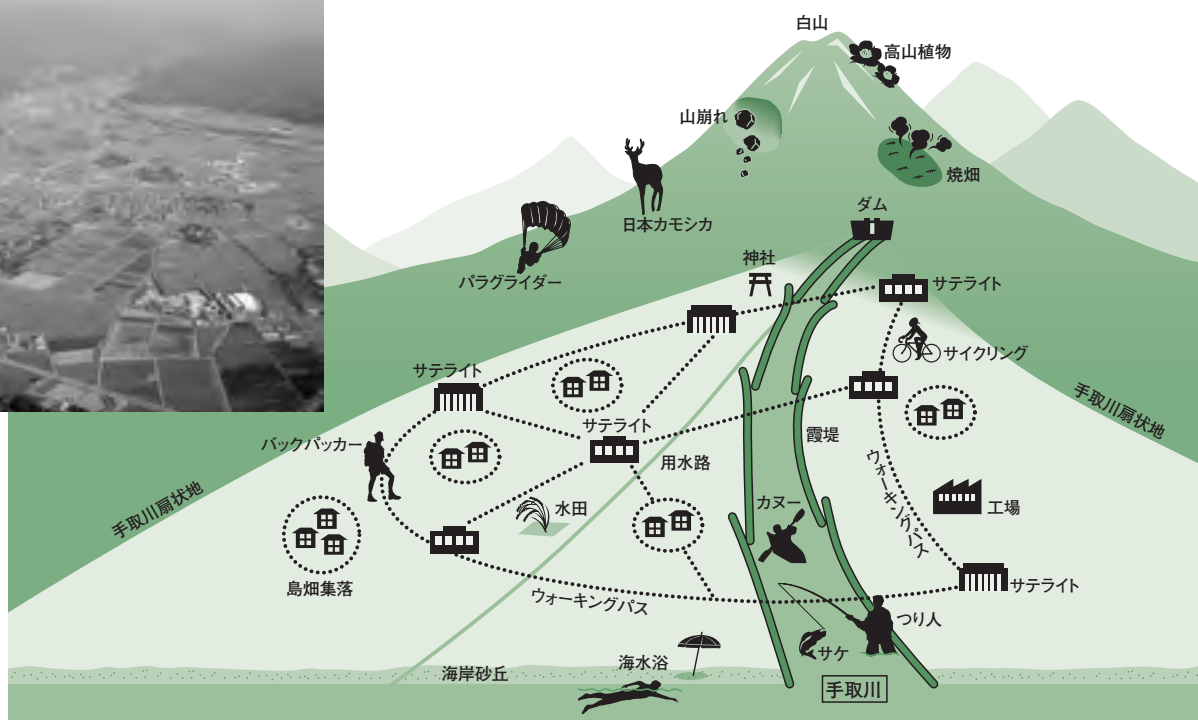
手取川は別名「石川」と呼ばれ、ため、平成14年度から「地域貢献特別支援事業」を実施している。金沢大学文学部が提唱する「手取川エコミュージアム構想」はこの事業の一環で、15年度から実施している。

## 手取川エコミュージアム構想に寄せる期待

白山連峰合衆国  
辻貴弘さんの話

平成17年2月1日に1市2町5村が合併して「白山市」が誕生します。手取川とのつながりが深い地域だけに、「エコミュージアム構想」は新市の一体感を生み出す一つのきっかけになるでしょう。金沢大学には、まちおこしにつながる住民活動を学問的に裏付け、進むべき方向を指し示す「舵取り役」を担ってほしい。住民活動の成否は、幅広い世代の参加がカギを握ります。しかし、現実的には若い世代の参加が少ないといえます。講義のなかで伝統産業などを取り上げ、地域に興味を持ってもらうことで、活動の核となるリーダーを大学内で育てるといった人材育成の分野にも積極的に乗り出してくれることを期待します。





金沢大が提唱する手取川エコミュージアム構想のイメージ図

も使用し、農業用水にも引き込まれている。現代においても、人々は川の恵みで生活しているといっている。手取川の流れば、平成17年2月に「白山市」として広域合併する1市2町5村をまたいでおり、昔ながらの川とのつながりを流域住民が再び思い起こすことで、エコミュージアム構想には手取川を軸にした地域交流を活発にさせていく狙いもある。

「手取川や白山をテーマに様々な取り組みを行っている組織や個人がいますが、お互いに知り合う機会がないですね。そういった人たちの受け皿としても期待したい」（観光協会幹部）と、構想への期待は膨らむ。

### 住民が気づかない資源が眠っている

15年度は、手取川流域に眠る資

「エコミュージアム」とは、地域全体を博物館という「器」に見立て、地域振興に役立てていく発想のことで、「地域丸ごと博物館」とも呼ばれる。金沢大学が提唱した構想では手取川流域にある自然・文化・伝統・産業・歴史などのすべてが、その対象となる。

構想は昨年スタートしたが、今年度は手取川流域に眠る資源を掘り起こし、地域の住民

源を掘り起こし、地域の住民による流域環境への理解を深めるため、昨年10月と今年2月に「手取川談義」を開催した。談義では、「手取川流域の自然環境」や「日本の霞堤システム」、「美川事業所の魚」、「遡上サケの活用」をテーマとした。

講義を聴いた参加者からは「大阪や京都から、多くの人たちが手取川にサケを釣りに来ているとは知らなかった」などの感想が寄せられ、身近な存在であればあるほど、手取川の存在価値に気づかない自分たちを振り返るきっかけになったようだ。

プロジェクトのリーダーを務める神谷浩夫教授は「大雨があった場合に、川の氾濫を最小限に食い止めるよう先人が考え出した『霞堤』が手取川にはあります。全国的に見てもこれほど美しい状態で現存しているものは少ない」と話し、手取川にはまだ地域住民が誇るこ

による流域環境への理解を深めるために「手取川談義」を開催した。

金沢大学では、地域内に点在する資源のネットワーク化を図るコーディネート役の立場と、資源の価値を学術的な視点から肉づけする知的サポートを担っていく。構想の下、地域住民が主体的に活動を行っていくことで、手取川流域一帯には、新たなつながりが生まれるだろう。

## 手取川エコミュージアム構想

K E Y W O R D

とができる資源があると指摘する。

### 人々の生活とともにあるエコミュージアム活動

地域との連携をさらに深めるため、16年度は自治体やNPO団体との連携をさらに広げ、エコミュージアムの実践活動に加わる団体を増やしていくことにしている。

手取川談義は継続開催していく予定で、講演形式ではなく、参加者がひざを交えて語ることができるよう実施していく。また、中学生・高校生向けの副読本も制作することになっている。

プロジェクトメンバーの青木賢人助教授は「エコミュージアムの活動に完成という形はない。人々の生活そのものがミュージアムになっていく。大学側は手取川流域にあるものに対して、国内外の価値づけを学問的に行っていきたい」とし、地域内の資源が効果的に連携するネットワークのコーディネート役も担っていくことにしている。

エコミュージアム活動は、住民が主体となっていくことに意義がある。水にかかわることはすべてミュージアムの範囲に含まれる。

身の回りの小さな事柄に目を向け、住民一人ひとりが活動に参加することで、地域に活力が生まれていくことは確かだ。金沢大学が提唱する手取川を中心としたネットワークは、徐々に広がりを見せようとしている。

## 文化・情報発信事業の紹介

# 地域ならではの情報を発信し 独自の文化を継承していく

「文化・情報発信」は、古くから大学が担い続けている地域貢献事業の一つ。全国の大学で行われている事業だけに、各地域の個性や特色を引き出す内容も多い。金沢大学でも様々な企画を練り、地域ならではの文化や、高度で知的な情報の発信に努めている。

## 加賀百万石を肌で感じる 「金沢学」文化体験学習

金沢大学が開設する文化体験学習講座「金沢学」は、体験学習に加え、講義による学問的な背景を知ること、文化理解を深めるための新しい文化体験学習プログラムである。

文化体験学習講座「金沢学への招待」は、日本社会の現代が集まる大都市圏で学ぶ留学生・日本人学生が、豊かな自然に恵まれ、歴史と伝統に育まれた文化を持つ金沢についての理解を深めるために、平成14年度から開講した。

14年度には50人に及ぶ全国からの参加者が、約1週間に渡って研修合宿を行い、金沢の文化・歴史を体験学習した。2年目となる今

年度は、内容の拡充と充実の観点から、初年度には実施できなかった内容をプログラムに加えた。

昨年度のような短期の研修合宿に代わり、10月11日から1月31日まで全15回にわたる講座「金沢学Ⅱ」とリンクし、全6回の文化体験学習を行うプログラムとした。講座「金沢学Ⅱ」は、県内大学間で単位互換が行える講座として、いしかわシティカレッジで開講した。従

って、参加者も県内の留学生・日本人学生とし、地域に点在する文化施設の利用や文化を継承している個人と団体の全面的な協力を得た。

文化体験学習プログラムである「金沢学」は、「金沢学Ⅱ」の単位認定とは直接関連するものではない。それにもかかわらず、県内の多くの留学生や日本人学生が参加した。11月8日の「座禅」を手始



「金沢学」で茶道の精神を学ぶ受講生  
金沢大学茶道部が指導にあたった

めに「金箔」「お茶」「金沢の食文化」「能楽鑑賞」「和太鼓」と体験し、12月20日、21日には1泊2日の研修合宿を行った。

参加者は、「金沢の歴史と文化に触れることができただけでなく、多くの友人を作ることができた」（日本人学生）、「日本の文化を体験でき、学生と交流を持ついい機会に

なった」（留学生）と、地域の文化に対する理解と国際交流の両方ができたことを喜んだ。さらに、「歴史と文化にあふれる金沢の町に住んでいながら、それに触れる機会を今までほとんど持たずにいた。

大学を卒業して金沢を離れてしまう前にぜひ体験したいと思っていた」、「金沢で生まれ育ったのに、

ほとんどと言っていないほど、金沢について知らずにいた」など、日本人学生にとっても、大学の位置する地域の歴史・文化を再認識する機会となった。

担当者は「金沢学を通して、日本と日本人についての理解が深まるように、また人々が継承し、守って来た文化をこれからのように発展させるかについて考える契機となつてほしい」と期待を込める。金沢学講座を受講した学生たちは卒業し、金沢から国内外へと飛び立っていく。この文化体験学習をきっかけに、金沢の文化・日本の文化を発信しつつ、交流の輪が広がっていくことを期待してやまない。（留学生センター）

## 金沢大学美術教室展覧会

造形教育普及活動を目的とした社会参加型の展覧会。美術作品の展示のほか、美術史学研究発表会、講演会、ワークショップを計画し、市民が参加できる企画にした。

今回は金沢市民芸術村と金沢大学附属小学校の2会場で実施した。



## 金沢大学附属図書館

# 蔵書総数 170万冊



一般の方でも利用できる  
のをご存じですか？

インターネットで  
らくらく蔵書検索！

お探しの一冊が  
きっと見つかります

蔵書は県内公共図書館でも  
借りられます

インターネットによる蔵書検索システムOPAC



**開館時間** 平日 8:45～20:00  
土曜日 9:00～16:00  
(日曜日は6月より開館予定)

**休館日** 祝日、年末年始

**お問い合わせ** 〒920-1192

金沢市角間町 金沢大学附属図書館  
TEL 076-264-5214 (サービスカウンター)  
FAX 076-264-5208  
etsuran@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/>

附属小では、本展覧会を利用した美術鑑賞の研究授業も実践した。今後は他機関の協力を得て、出張展覧会や出張ワークショップなどを企画し、造形教育の普及に努めていく。(教育学部)

### 北陸地震 火山防災研究会による防災セミナー

地震とほとんど無縁の地域から来た在留外国人を対象に、地震の発生機構や被害、その予防法や軽減法をまず説明した。また1995年の阪神・淡路大震災のビデオを放映し、さらに研究室所有の上下・水平振動同時加振可能な振動台で同震災の振動を再現し、体験してもらった。多くの人が地震防災に関する理解を深めた。(工学部)

### 第2、3回バイオサイエンスシンポジウム

平成15年5月、11月にバイオサ

イエンス関連の研究の交流と企業への情報提供を目指して開催され、学内外から140人を超える聴講者が参加した。

シンポジウムでは、学内外の指導的研究者による基調講演と学内および企業の先進的研究の発表が行われ、また、活発な質疑応答が行われ、学内や企業研究者との研究交流に成果を得た。(工学部)

### シンポジウム「学術雑誌の発展と著作権課題」

「デジタル時代における学術雑誌の新たな発展と著作権の課題」をテーマに11月10日、平成15年度図書館シンポジウムを開催した。

はじめに、千葉大学の土屋俊教授、国立情報学研究所の安達淳教授、埼玉大学附属図書館の酒井清彦情報サービス課長の講演とパネル討論があった。研究成果が発表できる学術雑誌を取り巻く状況は、冊子体ジャーナル価格の高騰、出

版社単位の高額な電子ジャーナルパッケージの増加、出版社の寡占化など、大学図書館がその大きな任務としていた「学術雑誌を入手し保存し提供する」という仕組みが成り立ち難い時代を迎えている。

デジタル化が学術コミュニケーションに及ぼす影響、出版社に頼らない学術情報の流通、デジタル環境下の著作権問題などについて、現在最前線で活躍している方々を迎えての講演は、参加した約80人の研究者及び学生、図書館関係者にとって、今後の図書館サービスについて考えるよい機会となった。

また講演の後の行なわれたパネル討論では、質問や要望が相次いだ。(附属図書館)

### 資料館特別展「大学図書館への招待」

平成13年度から、学内の行政文書等の散逸を防止するため「大学史料」の収集を始めた。これまで

に、学内に散在する前身校関連資料をほぼ収集した。

また、大学の歩みを歴史的・総合的にとらえるための歴史資料として、保存期間が満了した行政文書の収集に取り組んでいる。15年度資料館特別展「大学図書館への招待」では、まだ一般になじみの薄い「大学文書館 University Archives」への理解を深めることを目的に、前身校関連資料、保存期間が満了した行政文書、標本版・印章・実験機器など「もの」の資料を展示した。(附属図書館)

### 平成15年度資料館公開講演会

特別展「大学文書館への招待」の会期中に東京大学史料室専任室員谷本宗生氏(元金沢大学50年史編纂室員)を招き、平成15年度資料館公開講演会「大学アーカイブズの役割と活動」を開催した。谷本氏は、同史料室の活動紹介

に続き、本学50年史編纂の経験を通して、大学史料の散逸・廃棄防止にいかに取り組むべきかについて講演した。(附属図書館)

### 第54回暁烏記念式 記念講演

4月26日、金沢大学サテライト・プラザで、市民を中心に約100人の参加を得て開催した。

この式典は、昭和24年創立間もない本学に5万冊の図書(現在、「暁烏文庫」として角間の中央図書館に所蔵)を寄贈された暁烏敏(あけがらす・はや)師の遺徳を偲ぶ行事として毎年開催している。今年度は暁烏師没後50年を迎えた。

暁烏敏研究者の松田章一金沢学院短期大学教授が「暁烏敏の意義」と題して記念講演した。また、没後50年記念「暁烏敏展」を資料館と附属図書館の共催で資料館展示室で開催した。(附属図書館)



# 里山自然学校は住民主導で運営を 豊かな自然が取り持つ 大学と住民の新しい関係

「里山」。どこか懐かしさを感じるこの言葉は、自然と共存してきた人間を郷愁の思いへと誘う。その魅力に引きつけられ、金沢大学の里山自然学校には多くの参加者が集まり、住民が求めている大学とのパートナーシップの形が少しずつ具現化しようとしている。

を目的に平成11年に組織された。現在、金沢大学では様々な地域貢献事業が行われているが、その先駆けとなった事業といえる。

里山自然学校の運営には、学内の教職員だけではなく、地元住民や学校関係者など学外からもメンバーを選出した。大学と市民との融和を図る狙いがある。

活動は多岐にわたり、動植物の観察、「森の基地づくり」などの「小学校の総合学習プログラム支援」、総合学習の指導や自己啓発を目的とした「学校教員の里山研修」、シイタケ栽培やタケノコ掘り、自然観察会などの「レクリエーション活動」、養護学校児童・生徒の里山体験、棚田の復元、下草刈り、枝打ち、植林などの「里山保全作業」が主な事業だ。

また、里山活動のサポーターとして登録した「里山メイト」は、現在400人を越えている。有料の任意団体「角間の里山メイト」は100人以上に達し、3歳から70歳代までの幅広い年齢層が活動している。メイトを中心とした定期活動は月2回（第2、4土曜日）に実施している。

## 自然の魅力を子どもに 授業の教材として再認識

教育分野で里山自然学校に対する期待は高まっている。金沢市田上小に対する総合学習プログラムへの支援では、里山を次代の子どもたちに伝える絶好の機会となっ

ている。植物採集や山菜料理のほか、竹を使用した「基地」づくりなどに取り組んでおり、子どもたち自身も楽しんでいくという。「里山の基地づくりは一生忘れない思い出になった」、「身近な植物を自分で調べて知りたくなった」。自然の豊かさを肌で実感しているようだ。

学校教員の研修プログラムでは、実際に野外実習を行い、里山を活用した総合学習の在り方を考えた。参加した教員からは「環境をテーマにした学習のヒントを得ることができた」「自然に対する考え方が授業の中に取り入れる工夫をしなければならぬと思った」などの感想が寄せられ、学習指導の一助として里山の存在が再認識されている。

## メイトが自主企画 地域を活性化する組織へ

今年で6年目を迎えた里山自然学校。平成15年は節目の年となった。これまで大学側が用意した企画に参加するだけだった角間の里



シイタケの菌打ちに励む参加者。定期活動では様々な活動を企画・実施している

## 地域貢献の先駆け 里山が学習の場に

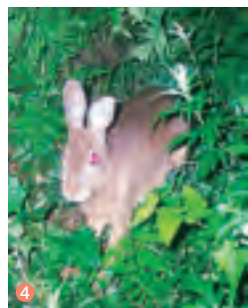
角間の里山に新緑が芽吹き始めた4月中旬の土曜日。朝から辺りの静けさを打ち消すように、「コン、コン」と木を叩く音が聞こえてく

る。そこには、林の中でシイタケづくりに励む5人の姿があった。原木にドリルなどで穴を開け、種菌を打ち込む作業に汗を流す5人。指導にあたったのは、地元有志として里山活動を支える松尾三郎さんだ。「この活動を通じているんな人と出会うことができた。参

加する人たちの心に、山を愛する気持ちをもう一度、呼び覚ましたい。教える手にも力が入る。

「角間の里山自然学校」は、里山ゾーンを学内の教育・研究の場として利用するだけでなく、青少年の自然体験や地域住民の生涯学習のフィールドとして開放すること

角間の里山学校の動物・活動



① 早春の角間の里山ゾーン  
 ② アカネズミ  
 ③ テン  
 ④ 野ウサギ  
 ⑤ ホタルの生息調査  
 ⑥ ドングリの首飾り作り  
 ⑦ 棚田での田植え

山メイト91人が、自主的に企画した活動を始めたのである。「教えられるだけ」という学校ではなく、大学とともに歩みだした市民の姿がそこにはあり、今では棚田の復元、竹林整備、竹炭焼き、動植物の調査など10件ほどの自主企画が行われるようになった。

竹林を整備している高島咲さん、金沢市小立野1丁目には「冬場を除いて、ほぼ毎日竹林に入っている。以前は荒れ放題だったが、少しはきれいになった。これから自分たちが考えた企画が生まれればいい」と話し、自ら企画した竹林管理に対する責任感の強さをのぞかせる。

自主企画が行われるようになったことについて、角間の里山自然学校代表で自然計測応用研究センターの中村浩二教授は、「もっとメイトたちが前面に出てきてほしい。自然の好きな人が集まるだけの組

織という段階は終わった。これからは地域の活気を高揚させ、大学の教育・研究にも刺激を与えるような組織に発展してほしい」と、メイトの組織運営への積極参加を促す。

大学に伝えはじめた住民  
 里山は大学、地域の財産

5年間の活動で、地域貢献を続けていくうえで大学側が抱える課題も見えてきた。市民のニーズへ迅速に対応する姿勢と実行力が問われているのである。

角間の里山自然学校事務局の佐川哲也教育学部助教授は「これまで住民は、大学に対して要望を出すとはしなかった。最近、里山自然学校を通じて様々な要望がぶつけられるようになり、住民と大学の間で直接的な対話が始まったと感じている」と語り、住民の

声に大学がどれだけ対応できるのか、地域貢献事業の成否を占うと指摘する。また中村教授は、「広がった輪を縮めないためにも大学には実行力が必要だ。里山自然学校の運営には大学、住民側の双方から専任者を置くことで、継続した活動が可能となる」とし、運営のサポートシステムの充実を訴える。

里山自然学校を大学開放の核と位置づける橋本哲哉副学長（社会貢献室長）は、「学校の拠点となる創立50周年記念館が秋には完成し、開かれた大学の総合的な窓口にもなっていくだろう」と期待を込める。

今後の大学運営や学校活動について、台湾からの留学生の紀歴倍さんは「大学は多くの資源を持っているが、活用しきれていない。台湾でも日本でも地域貢献を積極的にやるべきだ」と話す。里山自然学校の運営を手助けする中村晃規さん、金沢市鈴見台には、「里山

角間の里山自然学校

金沢大学のキャンパスは、かつて市中心部の金沢城址（現在は金沢城公園）内にあったが、昭和59年から6キロ離れた角間への総合移転（平成18年までに完了）を進めている。1955年（昭和30年）に及ぶ新キャンパス造成は、環境面に対する影響も大きいため、平成9年には約3分の1を「里山ゾーン」に指定した。

そのフィールドを利用して、教育・研究や生涯学習、子供たちの自然体験を行っているのが、里山自然学校である。小学校の総合学習の支援や自然観察会の開催、野山の保全作業などを主な活動とし、13年からは「角間の里山メイト」を組織して、メイトによる自主的な企画運営が展開されるようになった。人間と自然との共生関係を形作っていた「里山の復活」も目指す。

が子どもたちにとって身近な山になってほしい。今まで以上に住民が主導権を持って里山自然学校の運営に当たってほしい」と、今後の活動に思いをはせる。

古来、人は山と共存共栄し、生活の糧を得てきた。しかし、林業の衰退や、利便性を求めて市街地に移り住んだことで、双方のつな

がりは薄れ、山の荒廃が進んでいる。里山自然学校の活動は、「里山復活」の足掛かりにもなるだろう。広大な里山ゾーンは街の近くにある貴重な自然であり、大学の財産といえる。人的交流や知識発掘、生きた教育の場として、新たな役割を持たせていくことで、活動がさらに発展するに違いない。

## 共同研究センターからの報告

# 産学官連携に 対する取り組み

共同研究とは、民間企業などの研究者と大学の教官とが共通の課題(研究テーマ)について、対等の立場で研究をすることを指す。この共同研究から、社会の各方面のニーズに応える優れた研究成果が生まれており、共同研究の推進は金沢大学の研究成果を社会に還元するうえで大きな役割を果たしている。

## 1 民間企業などとの 共同研究の推進

金沢大学では平成7年度、この共同研究の推進を主たる使命とし、また地域の産業界・自治体および研究機関などが大学にアクセスする窓口として、共同研究センター

を設置し産学官連携の緊密化を図っている。

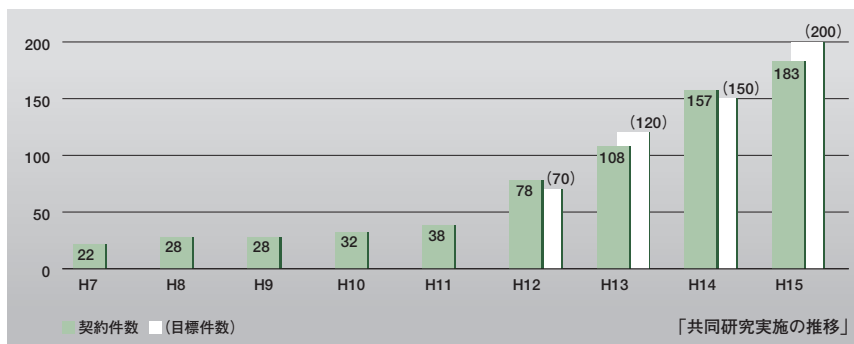
金沢大学での共同研究に関する取り組みは、11年度までは共同研究実施件数は増加傾向にあったが、年間30件程度で推移しており、本学と同規模の国立大学に比べて必ずしも評価される水準ではなかった。当時、学内の意識は極端にい

金沢大学の研究情報を発信した「北陸技術交流テクノフェア2003」



例えば「共同研究（＝産学官連携）」とは特定研究分野の人たちが取り組むもの」というものだった。

平成12年、「金沢大学は8学部、7大学院研究科、研究所、そして多くの研究センターを持ち、多様な研究者を擁する総合大学である。その強みを生かし、全学挙げて共同研究に取り組むべき」との気運が高まった。学内検討の結果、大学独自の取り組み手法として、毎月毎に実施目標件数を設定し、毎月開催される学内委員会が事務局毎の目標に対する実施状況を報告し



て達成・進捗状況を確認するとう、全学挙げての積極的な取り組みを実施することになった。

この取り組みの結果、急激に共同研究が活発に実施されるようになり、上のグラフが示す通り12年度は全学目標70件に対し78件と対前年度比で倍増し、13年度108件、14年度には国立大学ベスト10入りを果たす157件、15年度183件と着実に実績を重ね、4年間で約5倍（38件→183件）と急増した。現在では、文系理系問わずほとんどの部局で共同研究が行われており、地元企業はもとより、石川県や県内地方自治体などとも共同研究を進めている。企業の研究開発やITによる地域活性化など、地域に貢献する研究テーマも多くみられる。

今後、ますます産学官連携の重要性は高まっていく。金沢大学は、今後ともこの共同研究、産学官連携を推進していく。

## 2 共同研究センター 協力会の設置

金沢大学と地域の産業界が、地に足のついた産学連携と相互の日常的な交流を一層深めていくことを目的に、共同研究センター協力会が13年7月に設立された。現在、約100社の企業などが会員として参加している。

協力会では、大学との共同研究の推進や、大学が行う各種研究会、講演会、イベントなどに参加する

ことで、大学と会員企業とがより密着した関係を形成している。協力会には、会員企業のニーズと学内研究シーズをマッチングさせるため、また大学の産学官連携の推進のため、学外22人、学内12人のコーディネーターを配置しており、共同研究の推進や大学と地域の結びつけに一役買っている。

## 3 研究情報の発信

地域社会との連携促進を図るうえで、大学からの情報発信は欠かせない。

金沢大学では、人的資源のデータベース化による情報発信として、研究者個人の研究情報を公開する「金沢大学研究者総覧」、交流可能な研究テーマを紹介した「教官研究テーマ集」のCD-ROMを作成しており、大学ホームページにも掲載して、産学官連携の推進に一役買っている。

また、地域のイベントなどにおいては、毎年春に金沢市で開催される「MEX金沢（機械工業見本市金沢）」、秋に福井市で開催される「北陸技術交流テクノフェア」などに積極的に参加し、大学の研究情報を広く地域に発信している。

さらに、総合大学の多岐にわたる研究分野の研究成果を地域社会に役立てるために、シンポジウム、セミナー、講演会などを開催し、地域との交流を深めている。



(右)「金沢大学研究者総覧」CD-ROM  
(左)「教官研究テーマ集」CD-ROM

# 子育て支援のニーズ調査にみる 現代の親子関係事情

少子化が進行する今日、厚生労働省は少子化対策として、次世代を担う全ての家庭を社会全体で支援することを目的に「次世代育成支援対策推進法」を打ち出し、市町村に対して平成16年度は行動計画の策定、平成17年4月からの実施を義務づけた。そこで、当研究室ではこの対策が全ての子育て中の家庭の現状やニーズを把握したものであるように、全国に先駆けて「いしかわ子育て支援財団」の支援を受け、石川県全域でニーズ調査を実施したので、その一部を報告する。



## 支える人が少ない 核家族化が影響か

アンケート用紙は、これまでの子育て支援の経験から当研究室で独自に開発したものであり、1万6000部を配布した。そのうち母親3312人、父親2631人の計5943人から回収した。対象は、家庭で子育てをしている人である。

対象年齢は、母親が平均31・6歳、父親が平均34・5歳だった。そのうち、夫婦そろつての回答は1808組あった。

家族構成は、約半数の人が核家族で育っており、現在も55・5%が核家族であった(図1)。子どもの人数は2人が42・2%と最も多

く、次いで1人が30・5%、3人以上が27・3%だった。

母親の子育てを支えている人の数は、約半数が1人または2人で、0人と答えた人も2・3%おり、支援者の数は少なかった(図2)。

母親にとつての支援者は「配偶者」が最も多く、次いで「実母」、「友人」であり、父親では、「配偶者」がほとんどだった(図3)。

## 乳幼児の世話経験ない 母親の負担が大きい

高校を卒業するまでに体験した乳幼児の世話の有無では、両親とも、同時に調査した現役学生より世話体験が少なく、母親の年代別比較では、30代前半が最も少なくなっていた。父親は、母親よりさらに少なかった(図4)。

平日、母親が子どもと向かい合っている時間は、11時間から15時間未満が約7割を占めていた(図5)。一方で、父親は2時間未満が約半数、11・6%は全く関わりをもつておらず、子育ては過去に子どもと関わったことのない母親に委ねられていた(図6)。

## 父母の差くつきり 責任感と負担感

育児を両親で比較すると、「子育ては自分がすべきだと感じている」「子育てをしていて孤独だと感じている」「子どもに感情的に接してしまう」では、父親より母親のほうが「そう思う」と回答した割合が圧倒的に高かった。「自分だけの時間が欲しい」では、両親ともに「そう思う」と回答した割合が高くなっていた(図7)。

母親の育児観を子どもの年齢別に比較すると、いずれの項目でも、子どもの年齢が上がるにつれ、育児の負担感が増大していた。「子育てを楽しんでいる」の項目も、子どもの年齢が上がるにつれ「そう思う」と答えた割合が低くなっていった。したがって、母親は父親より子育てに対する責任感、負担感が強く、一方で子どもの発達に伴い、その対応に戸惑う様子がうかがえた。

母親が子育てで困っていることでは、「子育てやしつけがわからない」「対人関係が難しい」「一時預かり・一時保育が利用しにくい」などであった。

このような背景を持った親に対し、研究室で開発した親子の「心のきずな」を6タイプに分類する親子関係判定法を活用した育児相談を行い、悩みを抱える親自身が

## 育児相談166件 「虐待の連鎖」を防げ

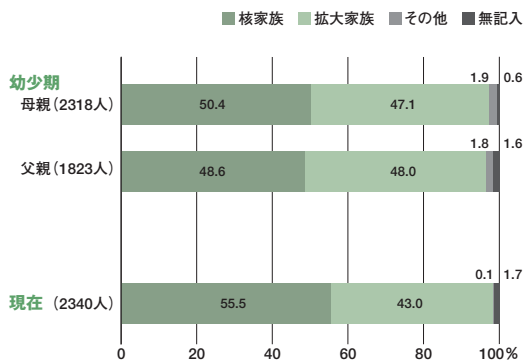


図1 家族構成

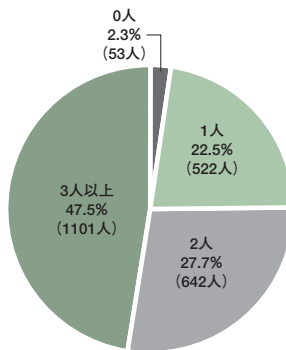


図2 母親の子育てを支えている人の数 (2318人)

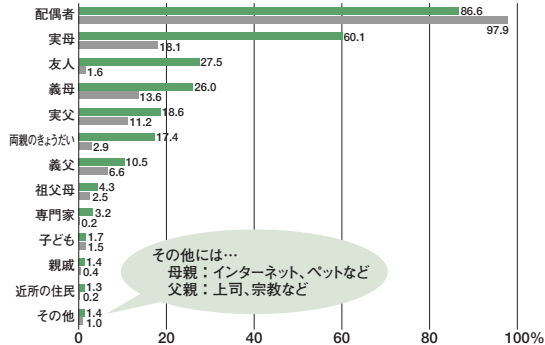


図3 子育てを支えてくれている人(複数回答)

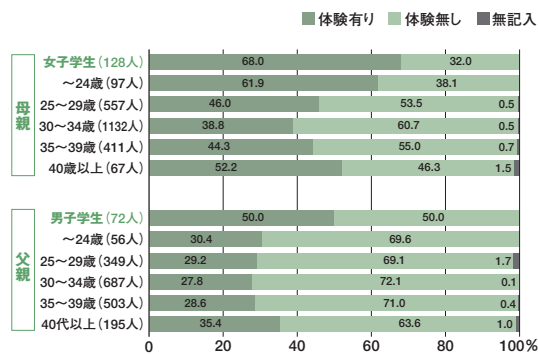


図4 両親が高校までに体験した乳幼児の世の有無

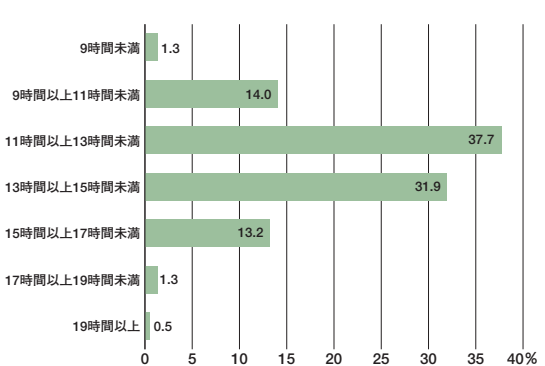


図5 母親と子どもだけで向かい合っている時間 (2116人)

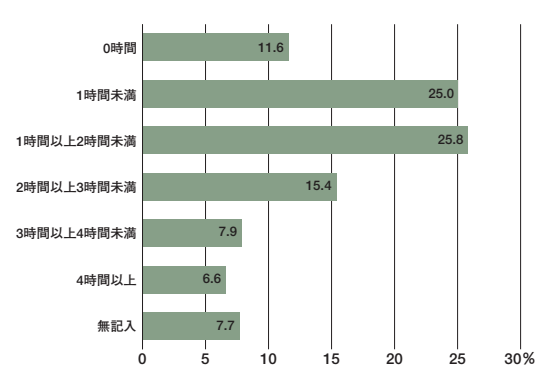


図6 父親と子どもが関わる時間：平日 (2318人)

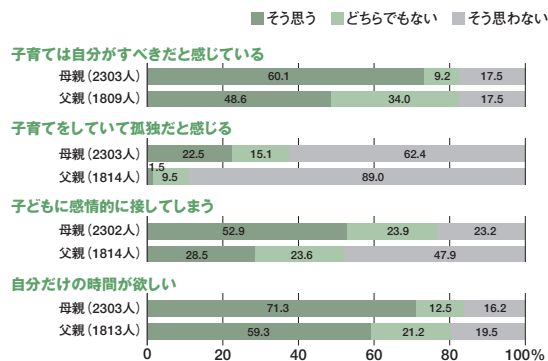


図7 両親の育児観

幼児期に体験した父母との関係を見つめ直す機会を提供している。このことを通して、わが子や夫とのより良い関係が築けるようになることを目的に、指定保育園や研究室で受けた平成15年度の相談件

### 様々な研究通じて 子育て支援に活用を

研究室では、子どもと若者、そ

して老人が集う機会を地域のNPO法人(子どもの発達支援センター・木村留美子理事兼務)とともに提供している。また、若者が子どもや老人と触れ合う機会を持つことで、どのような意識の変化が

生じるのかについての研究も進めている。また、近年、子どもの生活習慣は親の生活に影響されて夜型化している。この夜型の生活が子ども

ぼす影響について、縦断的な研究を行い、この成果を学術学会に報告するとともに、地域における子育て支援活動に活用できるように協力保育園や保護者、地域住民に還元している。



◆木村留美子(きむら・るみこ)  
金沢大学教授。保健学博士。神奈川県立衛生短期大学助教授、筑波大学医療技術短期大学部教授を経て、1999年より現職。  
専門分野は「小児保健学」と「小児環境発達学」。著書に「子どもとく」(前田書店)、「患者の心理とケアの指針」(金子書房)など多数。

軽度発達障害児の総合的支援に向けて

# 共通認識を持つことが 支援への第一歩

学習障害、注意欠陥・多動性障害、高機能広汎性発達障害などの「軽度発達障害」を持つ子どもの割合は、学齢人口の約6%に及ぶといわれる。知的な遅れがなく、コミュニケーションの取り方に問題を抱えるのが共通した特徴であり、障害を持つ子どもその親も、人知れず悩み、孤立し、不安を感じながら生活してきた。学校や医療機関、専門家など多様な人材と資源の連携を促す総合的な支援システムの確立が急務となっている。金沢大学の取り組みと今後の課題を探った。



昨年10月に教育プラザ富樫で開かれた事例検討会。様々な立場の人が集い、意見を交わした

## 約20%の親が 子の発達に不安を持つ

文部科学省が昨年2月に実施したアンケート調査では、学齢人口の6%にも及ぶ軽度発達障害の子どもたち。他の多くの子どもとほとんど変わらないため、「ユニークな子だね」「大丈夫ですよ」と安易に判断され、気づきが遅れるケースも多い。

一方、最近の親は子どもの発達・成長に敏感になっていることを示すデータも存在する。平成13年度に金沢市内の保育所・幼稚園の年長児を持つ親を対象にしたアンケートでは、約20%の親が自分の子どもの発達に不安を持っているとの結果が出ている。

## 気づきからサポートへ 支援の制度化を

「親がそれほど敏感になっているにもかかわらず、最近まで相談できる場所がなかった」と指摘するのは、教育学部の大井学教授。大井教授は、昨年5月に金沢市の委託を受けて「軽度発達障害をもつ子どものコミュニケーションにおける総合的支援に関する研究」を進め、金沢市が開設する「教育プラザ富樫」を拠点に、教育・福祉・医療の枠を超えた地域の総合的支援システムの確立を目指している。

これまでは、「タテ」「ヨコ」の連携がないことが問題視された。「タテ」とは、幼稚園・保育所から小中学校間を指し、「ヨコ」とは病



これまでの取り組みについて語る大井教授

## 取り組みへの共通認識 各所に広がる

大井教授はこれまでの研究を通じて、次の3点を成果に挙げる。

「一つは軽度発達障害というテーマに対して、大学の複数の教員が共通認識を持って取り組むという機運が高まったこと。二つ目は、それら教員と保護者、なかでも『金沢アスベの会』や『金沢エルデの会』といった親の自助グループとの間で、『一緒に何かしよう』という連携が進み始めたこと。もう



# 金沢大学が取り組む 障害児教育

金沢大学では、障害児に対する理解と知識を深めてもらうため、様々な事業に取り組んでいる。障害児を抱える保護者や教育関係者が障害を正しく理解することで、心理的な不安をとりのぞき、併せて適切な教育方法についても指導している。

教育学部附属養護学校が中心となって取り組んできた主な事業を紹介する。

一般の小中学校及び特殊学級担当教員を対象に、本学の教員や本校の教員が講師を務めて、特別支援教育の理解・促進についての講

## 特別支援教育 研修講座

ベトナム・ホーチミン市の障害児学校との姉妹校提携を通して、両国の障害児教育発展の貢献を目的としている。

児童・生徒の作品交換、両国教員による相互学校訪問をはじめとした障害児教育についての実践交流を推進し、障害児教育における国際交流のあり方に関して検討を重ねており、平成15年度はコミュニケーションについての比較研究を行った。

## ベトナム障害児校との 姉妹校協定促進

保育園・幼稚園に通う発達に遅れのある幼児が年々増加している現状を踏まえ、その保育・教育に悩む親や保育士を対象に、養護学

## 障害児の 幼児発達相談

義を行っている。

平成15年度は、通常学級にいる「気になる児童（学習障害や高機能自閉症）」といわれる子どもたちを正しく理解してもらう方策や、その子どもたちが学びやすい環境の整備について研修する講座と、主に特殊学級や養護学校で学ぶ児童・生徒に対しての身辺自立と性指導、コミュニケーションや教科指導などの実践的な指導について研修する2つの講座を開設した。

いずれの講座も、通常学級の教員や保護者、大学生など多くの参加者が集まり、関心の高さをうかがわれた。

平成15年度は、本校教員の指導のもと、保護者、元教員、地域住民や大学生が本校の行事などを通じてボランティア活動に参加した。

## 障害児のための ボランティア養成事業

障害のある子どもたちと実際に関わることにより、障害児（者）への理解を深めるとともに、保護者が時間的・心理的余裕をもつことができるといった障害児生活支援としてのボランティア養成講座に取り組んでいる。

適切な対応や早期指導、教育に関する情報の提供、関係機関への紹介や助言といった支援により、親や保育士の不安や戸惑いを軽減させることで、障害を持つ幼児の発達や成長に貢献することが期待される。

全般的な知的発達に遅れはないが、読み書きや計算、話す、聞くなど特定の学習能力に問題がある。同時に不器用さや対人関係における問題が学習障害に伴う形で現れることもある。

## 軽度発達障害

気が散ってしまうなどの「不注意」の状態、手足をさわさわ動かしたり、順番を待つことが苦手といった「多動性・衝動性」の症状がみられる。集中力がないと勘違いされることもあるが、興味のある特定の分野には驚くほどの集中力をみせることもある。



一つは、大学が起爆剤となって開いたフォーラムや検討会を通じて、保護者や学校教諭、行政関係者や議員、病院関係者といった立場の異なる人が集まり、「連携システムを作らねば」という共通意識を持てたことです。

また、大井教授は今後の課題として、行政側には人材の専門性、取り組みの継続性を含めた「教育

プラザ富樫の機能の向上」、大学側では他学部、附属学校、心理相談室といった「大学の資源の活用」を挙げる。

研究の中間報告は昨年11月にまとめた。最終報告は「提言」という形で近く提出される予定だ。大学が「仕掛け人」となって、総合的な支援体制が構築される日は、そう遠くないのかもしれない。

## 学習障害(LD)

全般的な知的発達に遅れはないが、読み書きや計算、話す、聞くなど特定の学習能力に問題がある。同時に不器用さや対人関係における問題が学習障害に伴う形で現れることもある。

## 注意欠陥・多動性障害(ADHD)

気が散ってしまうなどの「不注意」の状態、手足をさわさわ動かしたり、順番を待つことが苦手といった「多動性・衝動性」の症状がみられる。集中力がないと勘違いされることもあるが、興味のある特定の分野には驚くほどの集中力をみせることもある。

## 高機能広汎性発達障害

アスペルガー症候群や高機能自閉症が、この障害に含まれる。こだわりが強い、「冗談や比喩が通じず言葉通りに受け取ってしまう」、自分の興味のあることを一方的に話すなど、コミュニケーションの問題が見受けられる。アスペルガー症候群と高機能自閉症は同じ意味で使われることが多いが、臨床像には若干の違いがある。

薬物治療への信頼を高める

# 医薬品の悩みを解消へ 薬剤師が相談の窓口



NPO「健康 環境 教育の会 H・E・A・R・T」が運営するアカンサス薬局。  
新たな取り組みに関係者からも注目が集まる

多種多様な健康食品が販売され、医薬品がコンビニエンスストアで買える時代になった。病院で処方された薬の副作用などが心配になることもある。地域住民が日ごろ抱く薬全般の疑問に答え、薬剤師との距離を縮めるネットワークづくりが始まった。

## 住民と積極的に交流 地域医療の底上げ狙う

医薬分業が進み、薬剤師の存在が重要性を増すなか、金沢大学薬学部は「正しい医薬品の使い方ネットワーク」事業を展開している。国立大学では初めてとなる保険薬局で、NPO組織が運営する「アカンサス薬局」を平成15年2月に開局、同年10月には同薬局に隣接する形で「くすりと健康プラザ」を設立し、地域住民の健康福祉の増進への貢献を目指している。事業は、平成14年9月にNPOの認可を受けた「健康 環境 教育の会 H・E・A・R・T」と連携して実施。薬学部と薬剤師、薬学部と住民のつながりを深めな

がら医薬品に関する住民の知識を広め、薬剤師を養成する教育環境の整備の充実を図ることで、地域医療の向上につなげていく考えた。同時に薬学部と病院薬剤師、薬局薬剤師の3者をインターネットでつなぐ「くすりメイト・ドット・コム」、全国の薬剤師などで構成する「医薬学フロンティア研究会」を発足させ、ネットワーク上で情報交換する場を設けることで、薬物治療の最前線をリードしていく。

この事業が始められた背景には、第1に、薬剤師の姿が医師や看護師に比べて見えにくく、薬学部が果たすべき社会的な地域貢献が分かりづらいことが挙げられる。第2には、薬剤師が医薬品の説明をすることで、患者の立場を保護しようとの目的があった医薬分業が、



鈴木教授は「住民の健康管理も支援したい」と語る

患者の理解を得られないまま制度だけが先行し、薬剤師不足を招いた現状を憂慮したからだ。

## 質問は電子メールで 複数の薬剤師が回答

「くすりと健康プラザ」では、医薬品の効能や副作用、健康食品に対する疑問など、住民や患者からの質問を受け付けている。質問はEメール、電話、ファックスのほか、薬学部教員が駐在するプラザ内の相談コーナーでの面談（火、木曜日の10～12時、13～15時、祝日除く）で受ける。薬学部教員が質問に答え、即答できない場合には「くすりメイト・ドット・コム」「医薬学フロンティア研究会」の会員に質問内容

をメールし、チャット形式で複数回答を得る方式を採用。複数回答はプラザの教員が編集し、質問者に返答する。回答内容は、質問者の許可を得たうえで、プラザのホームページ内のデータベースに蓄積し、常時閲覧できるようにする。

チャット形式で、多くの薬剤師や医師から質問の答えを引き出すことによって、回答への信頼性が増すことになる。また、「くすりメイト・ドット・コム」「医薬学フロンティア研究会」のチャット上では、住民や患者の質問に答えるだけでなく、薬剤師らが業務のなかで感じた疑問なども話し合うことで、より確実な薬物治療を実現させる効果も期待されている。

## 社会が求める薬剤師をアカンサス薬局で養成

大学には、実践的な薬剤師を社会に送り出す義務がある。「健康環境 教育の会 H・E・A・R・T」理事長の辻彰教授は「これまで薬学部は、新薬の開発などを行う研究者の養成に主眼を置き、薬剤師を育てていくという視点に欠ける部分があった。薬剤師の教育過程が平成18年4月に、4年制から6年制へ変更される予定で、早急にカリキュラムを見直す必要があった」と語る。

薬剤師養成のカリキュラムには、実務実習がある。一般的に大学では、実務実習は保険薬局に任せている現状にあり、金沢大学も地域の保険薬局に依頼していた。実際の現場で経験を積むことができる一方で、薬局ごとに実習の内容が異なり、学生一人ひとりのレベルに違いがあることも否めない。

そこで、医薬分業に対応できる質の高い技能を身に付けるため、「アカンサス薬局」を薬学部生や薬学系大学院生の実務実習を重ねる研修の場とし、4週間の訓練プログラムを新たに作った。「圧倒的な知識不足を認識した。患者さんや医師とのコミュニケーションを円滑にするためには、薬に対する基本的な知識が土台に必要だと感じた」と参加した院生が語るように、研修中は、机上では学べない「生きた知識」が得られるのだ。

## 薬の知識を親に伝授 薬剤師が相談相手に

アカンサス薬局では、金沢市内の小学3年生101人、同5年生98人、中学2年生151人、高校2年生112人を対象に、家庭における薬の使用状況を把握するアンケートを実施した。

「薬を使用するとき、だれに相談するか」の問いでは、年齢に問わず約7割が親に相談していることが分かった。「自分の判断で薬を飲んだことがあるか」では、小学生の約9割、中学生の約5割、高校生約3割が「いいえ」と答えた。さらに「薬剤師の仕事を知っているか」では、小学3年生の約9割、小学5年生の約8割、中学2年生の約7割、高校2年生の約5割が「いいえ」だった。「薬剤師に薬について相談したことがあるか」の問いには、すべての年齢層で8〜9割が「いいえ」を選んだ。

この結果について、アカンサス薬局の薬局長を務める鈴木永雄教授は「家庭内で薬の使用を判断するのは親であることが分かった。親に対して正しい薬の使い方を教える機会を増やしたい」と話す。

また、「くすり」と健康プラザ事務局の伯水英夫助教授は「医薬品について不明な点があれば薬剤師に相談するという習慣が、住民に根づいていってほしい」と、「身近な薬局」があることの必要性を説く。

薬局では多くの医薬品が販売され、病院で複数の薬をもらうことも多い。何気なく飲んでいる薬に疑問を持ったとき、「くすり」と健康プラザ」のような相談できる場所があることは心強いに違いない。

TEL: FAX 076-234-0133  
E-mail: yplaza@p.kanazawa-u.ac.jp



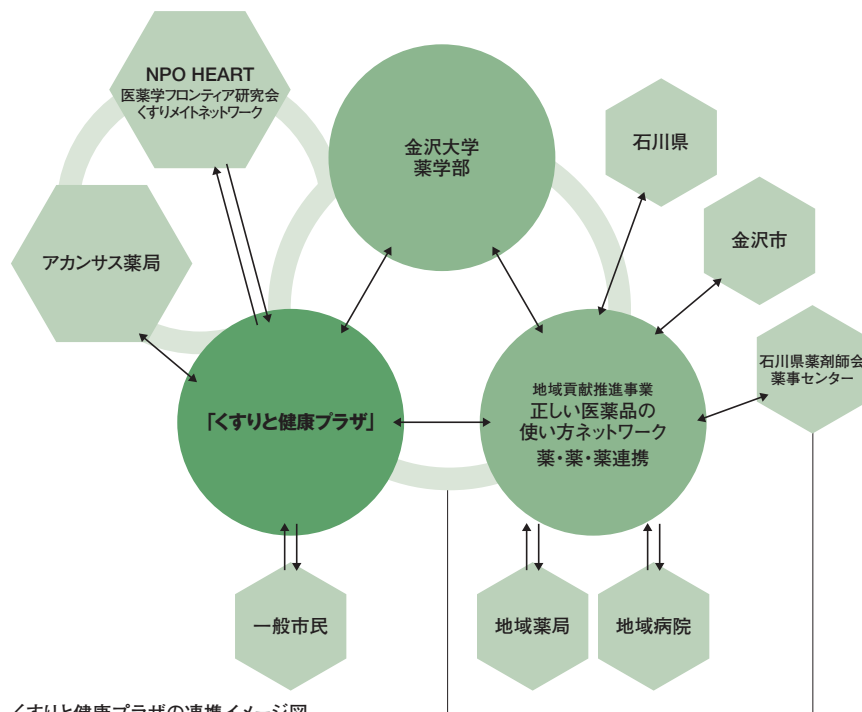
「くすり」と健康プラザ」のホームページ (http://www.kanazawa-univ-pharm.jp/kenko/)

## 正しい医薬品の使い方ネットワーク

健康に気をつかう現代人が増えているのに対し、医薬品や健康食品に対する疑問を相談できる場所は少ない。このような現状を打開するため「正しい医薬品の使い方ネットワーク」事業がスタートしている。

NPO組織が運営するアカンサス薬局に隣接する形で、「くすり」と健康プラザ」を開設。メールや電話などで相談を受け付け、薬学部の教員や薬剤師らで構成する「くすりメイト・ドット・コム」の会員が回答するシステムを構築して対応していく。

また、医薬分業で院外処方となったことで、これまでに以上に薬剤師が高度な知識と技量を身に付けることが求められる。大学では、アカンサス薬局で独自の実務実習を行い、より実践的な薬剤師の育成にも取り組んでいる。



くすり」と健康プラザ」の連携イメージ図

# 気になる心身のトラブル 健康に関する悩みを解決

ちょっとしたことから大きな異変まで、私たちの心身の悩みは尽きることがない。健康なときこそ万が一に備え、ある程度の知識を身につけておくことも必要だろう。これら一つひとつの事業がきつとあなたの役に立つはずだ。

負荷を用いた予測的姿勢制御適応能、誘発脳波を用いた認知機能、指屈曲動作を用いた選択反応時間、下腿筋力、股関節と足関節の柔軟性とした。

訓練で得られた成果は、転倒と深く関わる日常生活動作の改善、筋力や関節の柔軟性の向上、及び脳の認知機能を含めた神経機能の改善だった。(大学院医学系研究科)

## 市民公開セミナー 「がん医療の最前線」

毎回がんに関するテーマを設け、市民に対し金沢大学がん研究所と附属分子標的薬剤開発センターの業務内容・研究内容及び最新のがん医療技術を臨床系、基礎系から選出された教員が映像を使って分かりやすく講演している。講演後は、日ごろ疑問に感じていることなどの質問・相談を受け、分かりやすく説明している。

開催日は出席しやすい土・日曜日なので、夫婦、親子、若者など広い範囲の年齢層が出席する。(がん研究所)

## 市民の病院見学ツアー

附属病院の医療安全への取り組みを一般に理解してもらうために、昨年11月17日に院内見学ツアーⅡ写真Ⅱを実施した。この行事は、厚生労働省が定めた「医療安全推進週間」に関連して行われており、今回で2回目。平成15年度は13人が

が参加した。

ツアーでは、班別に検査部門での取り違い防止の取り組みや各システム、薬剤部門での各システムによる調剤ミス防止、栄養管理室・厨房部門での食中毒防止などの取り組みを担当者が説明した。参加者は、防災センターやベッド洗浄センター、病棟デイルームなども見学した。(医学部附属病院)



## 公開セミナー 「心の病気はつわくない」

県内中学校教職員を対象に、大学教員を中心とした精神科医や臨床心理士が5回シリーズ(1回2講義)で、精神障害の解説を講義形式で行った。

教職員の参加しやすい夏休みに実施し、毎回20〜30人の出席があった。精神障害にはありふれた病気が多いが、いわゆる偏見の対象となってきた歴史的な経緯があり、正しい知識の啓発が以前は少なかった。しかし、近年は精神科の敷

居も低くなりつつあり、一般の人々の正しい知識を得ようという意欲も高まってきている。

今回の公開セミナーは、心の病の正しい理解の一助にもなったようであり、今後も引き続き実施する予定である。(医学部附属病院)

## 第10回アレルギー週間 講演と相談会

日本アレルギー協会北陸支部石川県ブロックは、アレルギー週間(2月20日前後の1週間)に合わせ、一般を対象に「アレルギー疾患の講演と相談会」を開催しており、第10回を迎える平成16年は、2月21日にホテルイン金沢で開いた。

医学部附属病院の呼吸器内科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科および皮膚科の医師が、「アレルギー治療薬の効果と副作用」というテーマで、各科に関連するアレルギー疾患の講演と個別相談会を行った。本会によって、アレルギー疾患に対する正しい理解と適切な治療法が一般に普及することを期待している。(医学部附属病院)

## 「よりよい 白血病治療」金沢

白血病患者やその家族、また一般に、白血病に対する造血幹細胞移植について説明し、個別のケースも含めて質問に答えるフォーラム。造血幹細胞移植のアウトライ

ン、最新の移植術であるミニ移植、末梢血幹細胞移植、臍帯血移植の4項目が主な内容で、講師を務めた大学教員が移植の専門家として、説明と質疑を行った。(医学部附属病院)

## 白山登山者に 診療奉仕を続けて50年

金沢大学医学部の白山診療班(班員は学生、OBの医師含めて約320人)は、学生と活動に積極的なOBが中心となって白山室堂の一室で7、8月の夏山シーズン中に登山者への診療サービスをしている。診療室、医薬品と運営費は石川県環境安全部と「白山観光協会」が提供し、医師はボランティアで参加するという3者の連携が定着している。

戦後新設された金沢大学医学部と同じくらいの歴史があり、2003年には開設50周年記念祝典を催すことができた。

高山病や怪我が主な症状で、年間約200〜400人の患者を診ている。車道の終点から約6km離れていることもあり、重症者には県警のヘリコプターを要請することもある。

少なくとも週末には医師が駐在できるように日程調整をしているが、資格のある医師が不在の時には診断・投薬ができないことが悩み。中高年登山が増加している折から、診療所の存在はますます重要になるだろう。(医学部)



学生たちでにぎわう香林坊ハーバー。空洞化が目立つ中心市街地で、再活性化に対する期待も大きい

中心部のにぎわいを取り戻せ

# かつての映画館街に新風を吹き込む 学生グループ「香林坊ハーバー」

金沢の中心街から大学が郊外に移転するにつれ、街から学生の姿が消えはじめた。それは、かつて多くのスクリーンを抱えて賑わった香林坊映画館街も例外ではない。そんななか、金沢市役所や金沢大学が支援をする学生中心のまちおこしグループ「香林坊ハーバー」は生まれた。

## 旧プラザ劇場を拠点に イベントを企画・運営

まちづくりに積極的に関わっていくことを目的として学生たちが集まる香林坊ハーバーは、香林坊映画館街の一角にある旧プラザ劇場が拠点となっている。ネーミングには「人が集まる港」との意味が込められており、主に貸し館や自主イベントの企画・運営を手がけている。拠点となる旧プラザ劇場の改装作業は、内装・外装を担当している学生が自ら設計した。

改装した映画館では学生のためのイベントだけでなく、「地域の人や各大学の留学生も含めた金沢全体を巻き込んでいくような企画」(運営する学生の一人)を立案し、市民の交流の場を作っている。

## 演劇祭や講演会などで 延べ来館者は1万人

香林坊ハーバーが生まれたのは

平成14年10月。この1年半の活動は演劇祭や講演会など様々で、延べ来館者数は1万人に達した。メンバーの一人は「楽しいこともたくさんあった反面、苦勞も絶えなかった」というが、その苦勞を克服しつつ、香林坊ハーバーは確実に成長していった。時には厳しい指摘を受けながらも、地域の人々に見守られた香林坊ハーバーの1年半。「ボランティアの学生がまちおこしに汗を流す姿を市民の人々に見てもらい、何かの活力になれば」(別のメンバー)との思いも、香林坊ハーバーの学生たちにはあるのだという。

## カフェ今春オープンへ 学生たちの挑戦は続く

足かけ2年を迎えようとしている香林坊ハーバーが、また新たな挑戦をはじめた。この春から学生主体のカフェをオープンさせるのだ。講義の都合もあって毎日営業するわけにはいかないが、それでも週に1度か2度、学生の集う憩いの空間がかつての映画街に生まれる。貸し館などの活動にも、引き続き取り組んでいくという。

## メンバー 募集中

香林坊ハーバーではただ今メンバーを募集しています。一緒に予算内で自主イベントなどをやりませんか？興味のある方はご一報下さい。

〒920-0981 金沢市片町2丁目9-2  
fax:076-260-8815 tel:076-260-8801

## 香林坊ハーバー

KOHRINBO HARBOR



http://www.k-harbor.com  
mail:info@k-harbor.com



「このほかにも計画はたくさんある。新しい企画を立てて、金沢のまちなかに新風を吹き込みたい」(前出メンバー)。1年目以上に元気な活躍が期待できそうである。

## 金沢市が香林坊ハーバーに期待すること

今後学生ならではの発想と行動力で人を呼び込み、まちに元気を与え、さらには地域に根ざした香林坊ハーバーに成長してほしい。

# 社会貢献体制とその取り組み

「大学に(学術面などでの)協力を依頼したい」「大学の先生に講師をお願いしたい」。そう思ったことはないだろうか。たとえそう思ったとしても、「どこの誰にお願いすればいいのかわからない」「頼みづらい」といったように、問い合わせることには二の足を踏む人も多いようだ。だが、臆することなど全くない。積極的な姿勢を理解してもらうためにも、金沢大学が組織として取り組んでいる社会貢献の学内体制について説明する。

## 社会貢献の体制を整え 地域とともに歩み出す

平成14年5月、金沢大学は「地域貢献推進室(現・社会貢献室)」を設置した。大学の地域貢献への期待がますます高まるなか、地域のニーズに応える「総合窓口」が必要と考えたからだ。

さらに地域ニーズの調査や、それに応える地域貢献プランを企画・推進する専任の「地域貢献コーディネーター」も配置した。大学内の各部署には、部署の窓口として専門的な立場から地域貢献活動を協力・支援する「部局アドバイザー」も配置した。

「窓口」、大学の知的資源と地域のニーズを繋げる「橋渡し役」が配置され、社会貢献活動の推進体制は整った。金沢大学は「地域に開かれた大学」を目指し、確かな一歩を踏み出したのである。

## 自治体ともパートナーに 真の貢献ニーズを探る

大学が地域住民のニーズに基づいて地域社会に貢献するには、地方自治体と密接な連携協力関係を構築することも必要だ。

金沢大学は、社会貢献活動を推進する学内体制を整えるとともに、地方自治体との協力体制も築いている。平成14年度に設置した「金沢大学・石川県・金沢市連絡協議

会」がそれだ。

自治体側は、「これまで大学と地方自治体との連携は、個人的なネットワークによる連携で、組織的な連携ができていなかった。地域課題の解決には大学の『知』の協力が必要なときがあるが、この連絡協議会が大学との組織的な連携を図るための情報交換の場となっている」と説明。また、大学側は「自治体が地域住民のニーズを一番把握している。自治体のニーズを聞くことで、真に地域に求められている社会貢献事業が企画できる」「自治体のニーズから新たな研究課題が生まれ、教育研究の活性化につながる」といったメリットを指摘する声が多い。

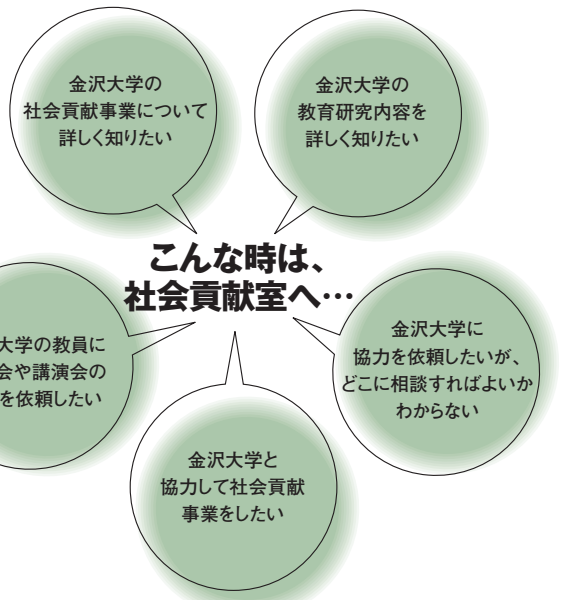
大学と自治体が協力すれば、大

## 社会貢献室とは…

地域のニーズに応える「大学の総合窓口」

大学の知と地域のニーズを繋ぐ「コーディネーター」

大学の社会貢献に関する「情報発信拠点」



## 協力の芽ばえ促す タウン・ミーティング

大学と自治体が協力し、その芽を育てようとしている試みの一つに「タウン・ミーティング」の存在が挙げられる。

金沢大学では、大学が地域に果たす役割を考え、地域住民と語る場を設けようと平成14年度から石川県内各地で「タウン・ミーティング」を開催してきた。これまで

に輪島市、加賀市、鶴来町で開催し、いずれも3時間程度の短い時間での意見交換だったが、住民と大学が膝を交えた意義は大きい。大学は住民の期待や要望を直接肌で感じる事ができ、住民は大学に対する要望を本音で話すことができた。

これまで、このような機会が無かったことを考えると、互いの「距離」が縮まったともいえる。これはタウン・ミーティング後に、開催した地域から大学に連携を求める要望が数多く寄せられるようになったことからもうかがえる。これまでも、金沢大学では公開講座、先進医学と地域医療、工業技術の共同研究、教員養成など多くの分野で社会貢献が定着して

いた。しかし大学がより目に見える直接的な社会貢献を考え、地方自治体との組織的連携をその糸口にしよとしたのは、近年のことである。

「大学と地域社会が相互理解を深めているか」「地域住民のニーズと合致しているか」と問われれば、答えは「今、それを求めている」となるだろう。そのためには、まず住民と大学が互いに顔を合わせ意見を交換できる雰囲気づくりが必要だ。

その場だけの意見交換だけではない、後に芽生える「連携の種類」をまく。真に地域に根ざした大学を目指すため、金沢大学は今後も「タウン・ミーティング」を続けていく。

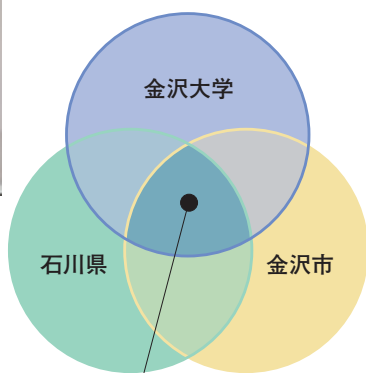
### 3年目迎える貢献体制 今まで以上に「知」を還元

金沢大学の地域貢献推進体制が整って2年あまり。これまでも生涯学習や人材養成、文化、情報発信、医療・保健・福祉、地域課題などさまざまな分野で、地域のニーズに対する大学の知的資源の還元を推進してきた。

さらに、ホームページやメールマガジンを利用し、積極的に情報を発信してきた。金沢大学教員が市民向けに提供できる講演テーマや、地域、企業との交流が可能な研究テーマをデータベース化し「金沢大学教員「講演テーマ」「研究テーマ」データベース」として

ホームページへの公開もした。前述の「タウン・ミーティング」も県内各地で開催し、地域のニーズや大学への期待も聞いた。また、県内の高等教育機関が参加する「いしかわシティ・カレッジ」や「いしかわ国際協力機構」との連携なども進めてきた。

これらの活動は、まだ始まったばかりで結果がすぐに出るわけではない。しかし、これら一つひとつの地道な活動を通して、大学と地域の連携の芽や新たな課題が少しずつ見えてきた。



金沢大学・石川県・金沢市連絡協議会

- 金沢大学：社会貢献室
- 石川県：企画開発部企画課高等教育振興室
- 金沢市：都市政策部企画調整課



ホームページで紹介している講演・研究テーマのデータベース



## 白山市タウン・ミーティング開催

およそ170年前に建てられた商家のたたずまいをそのままに残す鶴来町「横町うらら館」。12月15日、この趣ある建物を会場に、地域住民と語るタウン・ミーティングを開催した。

第3回目となる今回は、2005年2月に合併し白山市となる手取川流域8市町村の地理的中心にある鶴来町で「白山市タウン・ミーティング」として開催。吹雪く天候にもかかわらず、約70人の住民が参加、当初予定の20名の座敷は満員となり、6畳の仏間も開放しての会合となった。

まず、大学側から神谷浩夫文学部教授が地域固有の魅力を掘り起こし、それをまちづくりに生かしていくためのしくみと活動として「エコ・ミュージアム」を紹介、手取川流域をエコ・ミュージアムとすることで地域のまちづくりを持続的に発展させる構想を示した。

続いて、住民を代表して、きき酒師の小見麻利子さんと白山連峰合衆国の辻貴弘さんが話題提供を行い、地域の伝統と自然環境を再確認し、自分たちの手で保存・継承し、地域の魅力を情報発信することを呼びかけた。

メインイベントの意見交換会では、住民から積極的に意見が出た。手取川の水濁対策に関する要望や市町村合併を控えた地域の歴史・

文化の継承と広域の発展のあり方についての意見、手取川エコ・ミュージアム構想への質問・期待の意見などが聞かれた。

学生からは、「学生に期待することは何か」といった直接住民に問ひかける質問も飛び出した。

意見交換終了後、地域貢献推進室長(当時)の中村信一副学長がまとめのあいさつをした。

「大学は物事を『研究する』『解析する』『洞察する』という非常にいい側面を持っています。地域が文化を残し、それを大学が研究し、そして、文化とは何かという地域の求めに答えていくことが大事な使命だと思っています。これからは社会貢献、産学連携、人材養成、地域課題の解決を目的として、金沢大学ができることに全力で取り組んでいきたいと思っています」。



地域特性を考えた経済学

# 北陸経済の足元を見直す 大学の知識とネットワーク

日本経済が不況脱出の実感をつかめないなか、地方でも厳しい状況が続く。地域との連携が少なかった経済分野では、高度で専門的な知識を持つ大学に寄せられる期待は大きい。地域経済を再生する力ギとなる取り組みは始まったばかりだ。

## 地域の特徴を捉えた 経済学講座を開設

金沢大学では、地域貢献事業の一環として、平成14年7月に「地域経済情報センター」を経済学部開設した。経済学部の研究支援部門だった地域・経済資料室をセンターに格上げしたのは、経済の分野においても地域貢献、地域連携を強めていく必要性を感じ取ったからにはほかならない。

センター開設にあたり、理念に挙げたのは、「経済学を地域社会に生かし、普遍性のある経済学を金沢から発信し、地域との深い相関関係を構築する」ことで、「地域連携」「調査研究」「情報交流」の3つを事業内容の柱に据えた。

市民、NPOなどの各種団体、経済界、自治体と、大学との間の情報交換・人的交流の場を創出し、協力

関係を築いていくことを主眼に置く「地域連携事業」の第1弾として始められたのが「地域経済塾」だ。50万人が生活する都市が2つあったとした場合、この2つの都市は経済構造が同じだとはいえない。

金沢には金沢の、東京には東京の地域特性が経済に反映されているからだ。この地域特性を読み解き、高度な「北陸経済論」を学べる場として、昨年11月10日から2週間にわたって「実践的地域経済学講座」が開催された。

## 経済の中に溶け込む 金沢の伝統・文化

金沢・北陸のビジネス社会では、企業の歴史的な背景や社会における文化的な貢献度が重視され、実際の商習慣にも反映されている。文化的な要素が、企業の創造性や互いのネットワーク構築にも影響



湯涌温泉で行われた最終講義。金沢を含む北陸の文化や経済について知識を深めた

を与えている。

そのため、文化と経済が密接につながりを持つ金沢は、県外から赴任したビジネスマンには理解しづらい部分があるといえる。講座では、北陸地方の公共政策や地方財政、金沢の産業構造のほか、県民性や文化・伝統にまで踏み込んだ講義が行われた。

参加者からは「不況といわれて10数年。いまだにその状態から抜け出せないことから、目先の対







昨年11月の地域経済学実践的講座の開講式。碓山助教があいさつした

## 住民が求める大学の地域貢献を模索

「大学には自分たちが発想できないアカデミックな部分に期待している。専門性を究めてほしい」と、参加者のほとんどが好意を持って受け入れている。

センター長を務める碓山洋助教は、多くの大学が地域の要望に

策では効果がない。長期的な展望で専門的な知識を蓄える絶好の機会だった」という声が聞かれた一方で、「講義内容は面白かったが、今日、明日使えるような知識も教えてほしかった」との指摘もあり、「経済人と大学人との『実践的』という言葉の意味に温度差があった」（担当者）感も否めない。

大学が開催するこの種の講座では、多くの場合が一般向けに専門性を抑えた内容になってしまいがちだが、実践的地域経済学講座では、あえてレベルを下げなかった。

応えた研究を行う以前に、地域との積極的な接触が不足しているとしたうえで、「親しみやすく、地域に愛され、フットワークの軽い大

学づくりも必要だが、それは地域貢献の本質ではない。経営指南的な講座にはしたくなかった」とし、

地域貢献の在り方自体に改革の必要性を感じている。

今年3月7日に金沢大学サテライト・プラザで開かれた地域経済

## 地域経済情報センター

K E Y W O R D

以前は、地域・経済資料室の名称で呼ばれ、学部内の研究支援が主な役割だったが、平成14年7月から現在のセンターに移行し、地域と大学、学生との橋渡し役としての機能を大幅にアップさせて再スタートした。

経済学の専門知識を地域社会に還元し、地域との深い相関関係を構築していくことをセンターの理念とし、地域連携、調査研究、情報交流

の3事業を柱としている。地域連携の主力事業として、昨年11月に地域経済塾を立ち上げ、地域経済学講座を開催している。

北陸の風土に合った長期的なビジョンを展開していくうえで、必要となる経済知識の基盤づくりを図るとともに、業種をこえたネットワーク構築にも取り組むことで、地域経済の活性化を狙う。

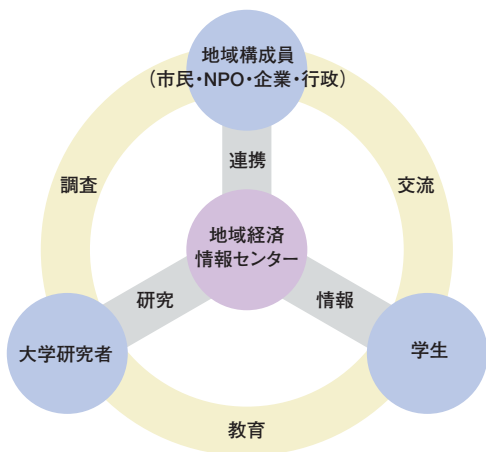
## 業種にこだわらないネットワークづくりを

地域経済においては、企業が互いに競争的共存関係でなければならぬ。発注と下請けの関係が固定されず、競争しながら共同しあうネットワークが必要になる。センターが担うべき役割は、業種を

## センター運営にも住民の声を反映

「地域の経済における問題が起こったら、まずセンターに相談してもらえようという環境を整えたい。ネットワークがあれば、問題を解決するにはこの企業に相談したらいいといったアドバイスもできるようになり、ビジネスチャンスも生まれてくるかもしれない」と碓山助教は期待を込める。

地域経済塾では今後、受講生からの「平日の夜は出席が難しい」という声を受けて、講座を週末に振り分けることや、金沢だけでなく能登地域での出張教室を開くこ



地域経済情報センターの概念図

とも検討していく。観光や人材育成などのテーマも取り上げ、専門性を追求したうえで、経済の初心者も学べる講座も開設したいとしている。また、センターの運営や共同研究のプロジェクトの企画立案にも、塾の受講生や地域住民の意見を反映させる意向だ。

大学の専門的な知識は地域の財産だ。地域で働き、学び、生活する人々を知的な分野で支援することで、大学の存在価値がこれまでに以上に高まることは間違いない。この取り組みが、北陸の経済を活性化させるカギを握っている。

# プレゼントつき!

## アンケートにご協力をお願いします

金沢大学では、皆様の声を取り入れ、ニーズに応じた地域貢献・社会貢献活動を推進していきたいと考えています。今後の活動の参考とするために、ぜひアンケートにご協力をお願いします。巻末のアンケートはがきにもれなく記入のうえ、お近くのポストに投函してください。切手は不要です。ご回答下さった方々の中から、毎月抽選で100名様に粗品を進呈します。この情報誌への感想もお寄せ下さい。



表紙の写真  
金沢大学社会貢献活動の中核事業の一つ「角間の里山自然学校」で行われた野鳥観察会。

### 編集 後記

たまたま見たテレビで、プロサッカークラブ「アルビレックス新潟」が紹介されていた。4万人を超えるサポーターによってスタジアムはオレンジ色に染まり、子どもからお年寄りまで幅広い年齢層のサポーターが声援を送っていた。その姿に驚き、興味を抱いた。1999年にJリーグに加盟し、プロとしては新しいクラブがなぜ、Jリーグトップの観客動員数を誇るクラブとなったのか。

人々はサッカーに夢と感動を求め、それを享受できる場所に集まっている。サポーターは最初からその感動を知っていたはずはない。クラブが住民を試合に招待し、サッカーから得る感動を伝えていったのだ。その地道な活動が実り、今では「地域に密着したクラブ」として成功を収めている。

大学だってそうだ。大学も学園を通して夢と感動を提供する場でありたい。本来、学園は人に夢と感動を与えるもの。しかし、その味を知っている人は限られているだろう。だからこそ、伝えていかなければならない。そのため手段が、大学の知の還元や情報発信をすることにほかならない。

情報発信のささやかな一歩として「地域とともに」を刊行した。「今までとひと味違うもの」「地域の人に見てもらえる広報誌」を作りたいとの思いで編集してきた。

紆余曲折を経て、ついに刊行にいたったが、果たしてこれが「地域の人に見てもらえる広報誌」となっているのだろうか。これは、読者の皆様に答えを委ねざるを得ない。今後、生かすため、読者の皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

最後に、この広報誌の編集・取材にあたって多大なご協力をいただいた関係者の皆様に、この場をかりて感謝申し上げます。

(山本秀樹)

平成16年3月発行

企画・編集・発行  
金沢大学地域貢献推進室

中村信一 地域貢献推進室長・副室長  
松坂浩史 地域貢献推進室主任・総務部総務課長  
上口大介 総務部総務課専門員  
水野昭憲 地域貢献コーディネーター  
山本秀樹 調査員  
掛野由香 調査員  
中村浩二 自然計測応用研究センター教授  
鈴木 漢 大学教育開放センター教授  
太田義興 企画広報室長  
中野昌明 経理部主計課長  
島田敏夫 学生部学生課長

編集協力 株式会社博文堂  
印刷 能登印刷株式会社

# 大学と皆さんを結ぶ 社会貢献室ホームページ

[http://www.ad.kanazawa-u.ac.jp/ad\\_chiiki/index.htm](http://www.ad.kanazawa-u.ac.jp/ad_chiiki/index.htm)



社会貢献情報が満載!

## ■ イベントのお知らせ

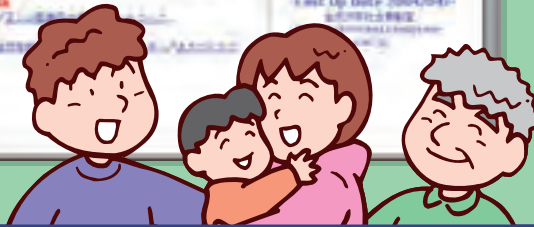
金沢大学のイベントに参加したい。  
皆さんの知的欲求を満たす  
イベントの予定が一目でわかる!!

## ■ 活動レポート

過去のイベントの様子を知りたい。  
イベントに参加できなくても、  
その様子わかる!!

## ■ 事業の紹介

金沢大学の社会貢献について  
詳しく知りたい。  
生涯学習、人材養成、地域交流など  
活動の紹介はココからリンク!!



情報がいち早くお手元に!  
**社会貢献メールマガジン**  
「地域とともに」



- 1 金沢大学の情報をいち早くお届けします。
- 2 どなたでも無料でご利用いただけます。
- 3 いつでも登録・解除ができます。
- 4 HTML版とテキスト版が選択できます。

お申し込みは上記ホームページからどうぞ!



## 学びと情報の発信拠点

# 金沢大学サテライト・プラザ

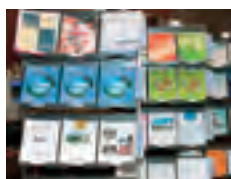
平成13年4月、市街地の金沢市西町教育研修館に「金沢大学サテライト・プラザ」を開設しました。

入学相談、公開講座・研究会やミニ講演会の開催、大学情報の発信などのほか、  
金沢大学の「サテライト・キャンパス」として授業やゼミでも広く活用されています。

### ■金沢大学から情報発信

各種印刷物、ビデオ、CD-ROM、ホームページを自由に  
ご覧いただけます。

### ■地域の大学等の情報を一堂に



「大学インフォメーション  
センター」では、金沢大  
学だけでなく、金沢市と  
その周辺の各大学・短  
大などの資料やホームペ  
ージもご覧いただけます。

### ■金沢大学へのお問い合わせ、ご相談

入学・学生生活・卒業後の進路、社会人入学、科目等  
履修生などについても、ご質問やご相談に応じます（内  
容によっては、後日回答させていただく場合もあります）。

### ■金沢大学の 「公開講座」「ミニ講演会」「語る会」



大学の「知」をみなさまに提供します。詳細は金沢大学  
ホームページ(URL:<http://www.kanazawa-u.ac.jp/j/>)  
に掲載しています。

### ■金沢大学とみなさまを結ぶ各種催し

講習会、スポーツ教室、父母・祖父母教室、寄席、大学  
生と中・高校生の交流会など、地域と大学を結ぶ様々な  
催しを開いています。



〒920-0913  
金沢市西町3番丁16番地  
TEL076-232-5343 FAX076-232-5383

E-mail : [satellite@spacelan.ne.jp](mailto:satellite@spacelan.ne.jp)  
U R L : <http://www.kanazawa-u.ac.jp/j/>

### ■開館時間

平 日：午前11時～午後7時  
土・日・祝日：午前10時～午後6時  
休 館 日：毎週火曜日、年末年始

